

建物延面積 一九六・二一平方呎

久保田町工業のセンターとして、各種の指導事業や講習会・研修会場として活用され現在に至。

昭和五十年 十月 八日 久保田町商工会婦人部創立。

下部組織 謎の旅行シール加盟店、久保田税務相談所、佐城地区青申会久保田支部、学校給食納入組合

食品衛生協会久保田分会、久保田町商工会物資納入組合

久保田町商工会歴代会長

初代	力久 兵次	昭和三五・七・二七	昭和三六・五・二四
二代	原田 慶六	昭和三六・五・二五	昭和三九・五・二四
三代	香月 義雄	〃三九・五・二五	〃四五・五・一九
四代	手塚 万次	〃四五・五・二〇	〃四八・五・一七
五代	大島 一	〃四八・五・一八	〃六〇・五・一二
六代	原田 参次	〃六〇・五・一三	〃六三・五・二五
七代	田中 利治	〃六三・五・二六	〃平成一二・五・二二
八代	木村 正幸	〃平成一二・五・二三	〃

現在

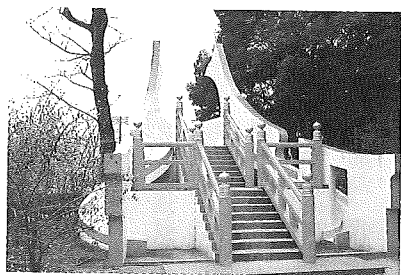
八 教育・文化

概 説

久保田町は早くより仏教文化の開花した地域と考えられる。その理由を二・三挙げると、往時の人々の暮らしを偲ばせる多くの寺社が存在する。その数や年代の古いこと等注目されるところである。最古の寺は久保田町上恒安にある、王子山三学寺（天台宗）で、承和五年（八三八）で、天台宗関係の寺院が周辺他町に比べ多いのも特色の一つである。嘉瀬川の流れに沿った古い港を地名にしている所には、平安時代の渡来僧「鑑真和上」の上陸地といわれる所や、鎌倉時代の作と推定される仏像、僧行基に関わる伝説、上恒安遺跡を中心とした出土品の数々に古代の息吹を感じさせられる。

概 説

中世になれば、龍造寺一門の居館があり軍役を免ぜられた豪族の日々は、文化的な活動の中に明け暮れたであろうと推測される。龍造寺の姓を村田に変えた一族は、久保田に連綿と続き、江戸時代は外国文化の窓口であった長崎に近い事もあって、西欧文化に接する機会に恵まれ、家臣を長崎や他の学問所に派遣するなど、教育・



鑑真和上上陸記念碑

文化の道を求めた。天明八年（一七八八）には久保田の元小路に武士の子弟の学問所『思齋館』を創設した。村田家九代の若狭（慶吉郎）は、極めて進歩的で科学・医学・宗教等新しい文化を取り入れ近代化の道を進めた。

久保田の狭い土地に、久保田宿・徳万宿という二つの宿場町があった事も特色の一つであろう。いずれも長崎街道に沿った昔の交通の要衝であったと思われる。往來の人々の中には著名人もあり、宿場は文化の通り道でもあった。往還といわれた道を挟んで暮らしをたてた庶民の学習の場でもあった。

近代になれば、マスコミ関係の人の活躍が目立っている。日本三大新聞の一つ、読売新聞の創設者の一人本野盛亨は元小路の出身で、二代目社長であった。三代目・四代目社長も本野家の人であった。地方紙として佐賀県を中心に県外でも活躍している佐賀新聞社を育て上げたのは久保田町久富出身の中尾都昭社長である。現在社長は、子から孫へと引き継がれている。久保田からマスコミ界を代表する人が出現し、今日の情報の時代を先見した事は久保田ならではの快挙であろう。

嘉瀬川の流れと共に久保田町の文化の流れも止まる事はない。町民の生涯学習に関する意欲は年々高まりつつある今日、学習の拠点としての図書館や歴史資料館の建設が望まれる。久保田の先輩が営々として築かれた文化の足跡を振り返り、古い伝統に学びつつ新しい文化の創造を進めたいものである。

（一）戦後の占領政策と民主教育

昭和二十年（一九四五）八月十五日、「終戦の詔書」の全国放送で、太平洋戦争の終結を了した。同年五月二十

二日公布の「戦時教育令」から一転して九月十五日には「新日本建設の教育方針」が公表された。この方針には「国体護持」は主張されていたものの、「世界平和」「人類の福祉」を教育目標とするものであった。

文部省はこの趣旨を徹底させるため、中央・地方の各地で講習会を開いた。連合国軍最高司令官総司令部は、「教育に関する四大指令」を示し、十月二十二日の「日本教育制度ニ対スル管理政策ニ関スル件」につづいて十月三十日には、「教員及教育関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件」、十二月十五日に「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並びニ公布ノ廃止ニ関スル件」、十二月三十一日には、「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」の四指令であった。

これによつて教育制度に関して軍国主義的、超国家主義的思想を排除、軍事教育の廃止、基本的人権の尊重、教育関係者の審査と追放、教育内容の検討と改訂など占領管理政策の基本方針が示された。さらに具体的には、二十一年五月六日に勅令および関係法令が定められ、教職員の適格審査および不適格者の「教職追放」が行なわれた。さらに軍国主義・超国家主義的教育と特に関係があったとして修身・日本歴史（国史）・地理の授業の停止、それらの教科書の回収、破棄などを命じた。

二十一年三月五日、総司令部の要請で米国教育使節団が来日し、三月三十一日連合国軍最高司令官に報告書を提出した。この報告書は、教育の目的・内容・方法、教育行政、教育養成、成人教育、国語の改革などをとりあげ、戦後のわが国の教育改革に強い影響を与えた。

教育基本法の制定

二十一年十一月三日、新しい「日本国憲法」が公布され、その第二六条に規定された国民の「ひとしく教育を受ける権利」にもとづいて「教育基本法」や「学校教育法」など教育関係の法律が定められた。

教育基本法は、日本国憲法との関係、新しい教育の本質とその重要性について述べた前文にはじまり、本文一カ条と付則とからなっている。教育の機会均等、九年間の義務教育、男女共学、学校教育とならんで社会教育の奨励、政治的中立性、公立学校においては宗教上の中立性、教育行政の目標などについて定めた。

学校教育法の制定

昭和二十二年三月三十一日公布法律第二五号は、戦後の教育改革の柱である新学制の根幹をなす法律であり、憲法、教育基本法に示された教育理念を具体化したもので、教育の機会均等等など、普通教育の普及向上と男女差の撤廃、学制の単純化、学術文化の進展など我が国学校制度の基本を定めたものであり、これによって六・三・三・四の新学制が成立した。すなわち小学校六年、中学校三年の九年を初等、中等教育として義務教育とした。更に高等学校三年、大学四年の高等教育を設けて学校体系の単純化をはかり、総ての学校について男女共学を原則として認めることとした。

更に実質的な教育機関の保障として勤労青少年に対し、高等学校、大学における夜間の教育、通信による教育が認められた。

教育委員会法の制定

昭和二十三年七月十五日公布法律第一七〇号は、学校教育の行政に関することを定めたもので、戦後の新しい教育は連合国総司令部の指導によって民主的な教育の方向が指示、勧告されたが、その中で初等中等学校の教育行政について、一般民衆の投票により選出された代議的公民によって構成される地方教育行政機関の設置及びこの機関にたより教育の領域による専門的訓練と経験を得た者を教育指導者として任命することが勧告されている。これがわが国における教育委員会制度創設の発端である。教育刷新委員会が日本政府に建議を行なった中で、市町村および府県に一般地方教育行政から独立して教育行政を行なう公選による教育委員会を置き、この教育委員会によって管内の教育行政を行なうことを勧告した。

同法の設置単位は、都道府県、市町村、市町村の一部事務組合。委員定数は、五人。ただし、町村は三人とすることができる。

教育長は、任用資格なし。都道府県および指定都市の教育長は、文部大臣の承認を得て、教育委員会が任命する。市町村の教育長は、委員の中から都道府県教育委員会の承認を得て、教育委員会が任命する。

権限については、教育財産の取得、管理、処分および教育委員会の諸掌事項に係る契約、支出等は地方公共団体の長が行う。予算、条例案の議会上程も地方公共団体の長が行なうことに改められた。

小・中学校の校長、教員の人事は、都道府県教育委員会が任命権者となる。ただし、市町村教育委員会の内心をまわって行なう。措置要求については、都道府県、市町村にある。以上が、現在の教育委員会の概要であり、久保田町の教育もこの教育委員会の管理と指導のもとに展開されているのである。

(二) 教育委員会の発足

〔市町村教育委員の選挙〕

戦後における教育行政の改革では、注目すべきものに、「教育委員会」の設置があった。教育に対する政治的・官僚的な不当な支配を排除し、教育行政を一般行政から独立させ、公正な民意を尊重すると共に教育の目的を達成するために必要な条件整備は目標とする趣旨を強調した。文部省の法案作成には一般行政との関わり、占領軍総司令部との関係などで難行したが、昭和二十三年七月十五日公布となった。都道府県および市町村の教育委員会選挙は同年十月五日に行なわれた。

初の町村教委の選挙は、三四町村が無投票となつて、二市八五町村が一・六倍の競争率で四八四人の教育委員が選ばれた。教育委員の選挙の実情は、一般の関心は低調で、多数の無投票町村が出た。

〔任命制への移行〕

地方教育委員会は ①設置単位、②委員の専任方法、③教育委員会の権限・性格、④教職員の給与負担と人事権、⑤県教育委員会と地方教育委員会および地方教育委員会相互の調整、検討を要する事が少なくなつた。

その後、制度全般に再検討がなされた結果、三十一年六月三十日、現行の地方教育行政の組織運営に関する法律が公布された。これによって、十月一日から任命制教育委員会が発足した。

(三) 教育委員会の基本施策

学校教育

子供達は「未来の久保田」を担う貴重な宝である。

心身ともに健康で知性と創造性に富み、豊かな人間性と実践力を持った、健全な子供の育成は、最も重要な課題である。これを実現するため学校・家庭・地域社会が一体となった教育を推進する。

パソコン教室の整備・ALT（外国青年英語指導助手招致事業）の導入により、情報化社会・国際社会に対応できる児童・生徒の育成に全力を注ぐ。

教育施設設備等については、平成九年度の中学校体育館の改築で、一応の完成を見たが、今後人口増に伴う児童・生徒数に合わせた教室の増設、給食施設の拡充整備、耐震校舎の整備、自然環境の整備等を図らねばならない。

学校教育の充実

小中一貫した建学の精神「見賢思齊」の育成指導

学力向上推進対策

個性を生かし、創造力を育てる教育の推進

	就任	退任	期間	公選制 任命制(小路)
中島 松次	昭和二十七・十一・一	昭和三十一年・九・三十	三年十一月	公選制
石丸 友吉	〃 三十一・一・一	〃 三十三・九・三十	二年〇月	公選制
藤瀬 登	〃 三十三・一〇・四	〃 三十七・九・三十	四年〇月	公選制
田中 治八	〃 三十七・一〇・一	〃 四十五・九・三十	八年〇月	公選制
中島 松治	〃 四十五・一〇・一	〃 四十六・四・十	〇年六月	公選制
大坪 正利	〃 四十六・六・一	〃 五十七・九・三十	一一年四月	公選制
嶋田 健橘	〃 五十七・十二・一	平成 一・十・三	六年一〇月	公選制
山田 實	平成 一・十・五	〃 七・八・三十一	五年一〇月	公選制
堤 善正	〃 七・九・一	〃 十二・一・八	四年五月	公選制
高岸 範雄	〃 十二・一・十一	現在に至る		公選制

家庭教育の向上

歴代教育委員長

心豊かで健全な児童生徒の育成
 教育機器の内容充実
 A・L・T(外国青年英語指導助手招致事業)による語学指導
 教育環境の整備充実
 智・徳・体三位一体の教育推進
 国・郷土を愛する心の育成指導

幼児教育
 幼児の心身の調和のとれた成長を促すため、社会性・感受性を大切にし、幼児教育の充実・改善を図る。個人差をもった幼児達を幼稚園・保育園という集団生活の場で、個性を伸ばしながら集団生活を体験させ、生きる事の喜びと意欲を感受させるべく指導の充実を期し、幼児教育の振興を図る。

幼児教育の振興

教育内容、指導方法の充実を図る
 幼稚園・保育園と家庭との連帯の緊密化
 集団生活の中で個性を伸ばす教育



久保田幼稚園教室

歴代教育長

就任	退任	期間
石丸 友吉	昭和二十七・十一・一	昭和二十八・九・三十
北村 惣次	二十八・十一・一	二十九・十二・三十一
石丸 友吉	三十・一・十	三十・三・三十一
池田 嘉六	三十・四・十	三十一・九・三十
成清 利八	三十一・十一・一	三十三・六・三十
石丸 友吉	三十三・十一・四	三十七・七・三
陣内 熊雄	三十七・九・一	四十五・六・三十
大坪 辰二	四十五・七・一	四十八・九・三十
堤 善正	四十八・十二・一	平成 七・八・三十一
山田 實	平成 七・九・一	八・十二・三十一
関 曉夫	九・一・一	現在に至る

公選制(小路)
 (西川副中学校長)
 (小路助役兼任)
 (川上中学校長)
 任命制
 (町西)

平成十三年度久保田町教育委員会委員

委員長	年令	就任期間
高岸範雄	六六	平成 八・四・一
		平成十六・三・三十一

職務代理	委員	教育長
西岡一義	伊東悦二郎	関 曉夫
五一	六四	六三
九・一・一	十二・六・二十	九・十・四
十六・十二・三十一	十三・十・三十一	十三・十・三
	十三・七・一	
	十五・六・三十	
	野口ミドリ	
	四五	

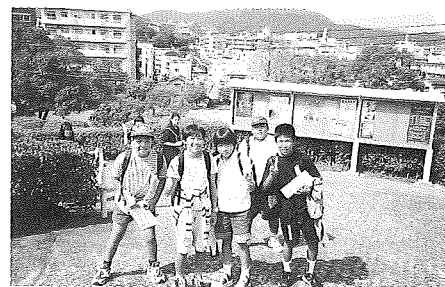
歴代教育委員

就任	任期
成清 利八	昭和三十・一・十
古賀 松代	三十四・一・一
石丸 友吉	三十四・一・一
藤瀬 登	三十三・一・一
堤 富代	三十四・一・一
石丸 友吉	三十六・二・十四
古賀 醇一郎	三十七・一・一
森 勇六	四十・一・一
陣内 熊雄	三十七・一・一
田中 治八	三十九・九・三十
	四十・一・一
	三十九・九・三十
	四十一・九・三十



小・中学校給食室

堤 善正	平成 元・十一・一	一	平成 五・十・三十一
前田 守正	夕 夕・十・四	夕	夕 二・十二・十一死去
江原 吉次	夕 三・七・一	夕	夕 五・十・三
山田 實	夕 夕・四・夕	夕	夕 七・三・三十一
江原 吉次	夕 夕・七・一	夕	夕 五・十・三
原田イサ子	夕 四・二・八	夕	夕 八・二・七
堤 松次	夕 四・十一・一	夕	夕 夕・十・三十一
江原 吉次	夕 五・十・四	夕	夕 七・二・九死去
堤 善正	夕 夕・十一・一	夕	夕 九・十・三十一
山田 實	夕 七・四・夕	夕	夕 十一・三・三十一
関 夫	夕 夕・七・夕	夕	夕 九・十・三
高岸 範雄	夕 八・四・夕	夕	夕 十二・三・三十一
西岡 一義	夕 九・一・夕	夕	夕 十二・十二・夕
関 曉夫	夕 夕・十・四	夕	夕 十三・十・三
堤 善正	夕 夕・十一・一	夕	夕 十二・一・八死去
金田 礼子	夕 十一・七・夕	夕	夕 十三・三・三十一
高岸 範雄	夕 十二・四・夕	夕	夕 至現在



修学旅行

(四) 学校教育

校名の由来

久保田町の小・中学校は、村田家の学校「思斉館」の名を受継ぎ、建学の精神を今に生かし、思斉小学校、思斉中学校とよんでいる。

中国の先哲、孔子の言行を収録した本、「論語」の中に、里仁第四というのがありその中の一つに、子曰、見賢思齊焉 見不賢内自省也。(子曰く、賢ヲ見テハ、齊カラシムコトヲ思ヒ、不賢ヲ見テハ内ニ自ラ省ルナリ。)という言葉がある。「思斉」自分も同一でありたいと思う。

賢人を見ては自分もその人と同じようになりたいと思ひ、不賢の人を見ては内心に自分もまたこのような不賢なことはないかと反省するようにせねばならぬということである。

至現在

思育小学校沿革

昭和二十二・四

夕二十四・八

久保田村立思育小学校と改称し、六カ年修了制度、高等科を廃し新制中学校へ進学する。ジュデイス台風による大風水害にあい、床上浸水一層に達し、備品・校舎の被害甚大。南校舎五教室増築する。

ミルクのみの給食開始。

県指定による学校図書館研究校となる。

夕三十・四 夕三十・四 夕三十一・五

夕三十一・五

完全給食開始する。

夕三十三・十一 夕三十五・四

夕三十七・一

夕三十八・十二

夕四十・一

校長室・職員室・学校図書館など二階建二八坪改築竣工。(八六九万円)

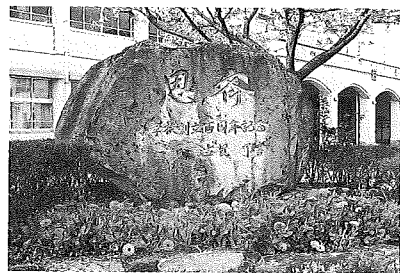
夕四十二・一

特別教室(理科室・音楽室・図工室等)二階建二六〇坪及び宿直室・用務員室二四坪、竣工する。

夕夕・四

夕夕・十

夕四十二・一



学校創立百周年記念碑

学校教育

夕四十五・十二

夕四十六・五

夕四十八・十一

夕五十二・四

夕五十四・二

夕五十五・四

夕六十二・十一

夕六十三・十一

夕六十二・十一

夕六十三・十一

夕六十二・十一

夕六十三・十一

夕六十二・十一

夕六十三・十一

夕六十二・十一

夕六十三・十一

夕六十二・十一

学校保健優秀校として表彰される。(県)

文部省・県教育委員会指定道徳教育研究校(第一年次)

五〇はプール落成 (五、五〇〇万円)

防災施設完了 (機械警備切替)

創立一〇〇周年記念式典挙行(町主催)

新校舎二階建一棟(視聴覚教室・児童云室・普通教室一〇教室)竣工する。

文部省同和教育推進地区指定をうく。

新校舎竣工。

給食室竣工。

体育館新築

コンピュータ設置(教師用一台、児童用二〇台)

文部省、佐賀県教育委員会より道徳教育の研究指定・委嘱を受ける。

夕

道徳教育推進校(協同推進校) 研究発表会開催。

給食優良校として文部大臣賞を受ける。

図書館図書管理システム導入(五台)

文部省・佐賀県教育委員会より心身障害児理解推進の研究指定・委嘱を受ける。



小学校玄関

昭和2年現在位置に設置する以前の歴代校長一覧

職名	氏名	就任年月	退任年月
初代	迎 達次郎	不 明	
2代	前 間 嘉久蔵	不 明	
3代	千 手 小一郎	明治32. 7	明治38. 2
4代	本 村 虎 吉	明治38. 3	明治39. 3
5代	本 野 己一郎	明治39. 4	明治40. 11
6代	真 島 茂 輔	明治40. 11	明治41. 6
7代	香 田 虎 一	明治41. 6	明治41. 12
8代	川 副 友四郎	明治42. 12	大正 2. 3
9代	前 田 嘉一郎	大正 2. 4	大正 4. 3
10代	原 田 千之	大正 4. 4	大正 8. 3
11代	森 四 郎	大正 8. 4	大正13. 9
12代	香 月 清 次	大正13. 4	昭和 2. 3

歴代校長一覧

職名	氏名	就任年月	退任年月
初代	遠 田 実	昭和2. 4	昭和 5. 3
2代	福 島 清太郎	昭和 5. 4	昭和11. 3
3代	鶴 田 辰 次	昭和11. 4	昭和17. 3
4代	真 島 豹 吉	昭和17. 4	昭和20. 3
5代	成 清 利 八	昭和20. 4	昭和21. 3
6代	正 宝 熊 雄	昭和21. 4	昭和22. 3
7代	辻 雄 次	昭和22. 4	昭和23. 3
8代	村 岡 五 郎	昭和23. 4	昭和25. 3
9代	陣 内 熊 雄	昭和25. 4	昭和30. 3
10代	淵 田 正 夫	昭和30. 4	昭和31. 3
11代	大 坪 辰 二	昭和31. 4	昭和38. 3
12代	田 中 末 大	昭和38. 4	昭和41. 11
13代	坂 井 頼 一	昭和41. 12	昭和42. 3
14代	永 松 憲 治	昭和42. 4	昭和43. 3
15代	力 久 重 雄	昭和43. 4	昭和44. 3
16代	福 岡 勇四郎	昭和44. 4	昭和46. 3
17代	福 田 文 治	昭和46. 4	昭和47. 3
18代	篠 崎 規	昭和47. 4	昭和50. 3
19代	早 田 初 義	昭和50. 4	昭和53. 3
20代	福 井 知 男	昭和53. 4	昭和56. 3
21代	山 田 實	昭和56. 4	昭和59. 3
22代	永 瀬 義 明	昭和59. 4	昭和60. 3
23代	平安寺 扶	昭和60. 4	平成 元. 3
24代	儀 間 厚	平成 元. 4	平成 5. 6
25代	瀬 口 昭 彦	平成 5. 7	平成 9. 3
26代	古 賀 淳 一	平成 9. 4	平成12. 3
27代	江 頭 敏 男	平成12. 4	~



玄関と花



体育館



給食

平成 八・十 文部省・佐賀県教育委員会より研究発表会開催。
 九・十一 ハンガリー児童との交流。
 十・五 防犯ブザー贈呈式。全日本ドッジボール選手権全国大会出場（東京）
 十一・一 プール浄化機械改装工事
 十一・四 給食室真空冷却機設置。 パソコン室改修工事、二二台設置。（八月）
 十二・二 春の全国小学校ドッジボール九州大会出場
 十二・四 県小・中連携教育推進モデル事業（年間）
 十二・三 防犯安全対策のためフェンス等設備

校 歌

古賀 残星 作詞
安部 幸明 作曲

なのはなけーむーるつくしののに
いらかのいーるもあおさびて
れきしはふーるくゆかーしくも
われらのまなびやしせいこう

校 歌 (旧)

真島 約吉 作詞
真島 約吉 作曲

♩ = 108 拍

1. ももちの と も あ ほら か ら よ
2. ももちの と も よ ほら か ら よ

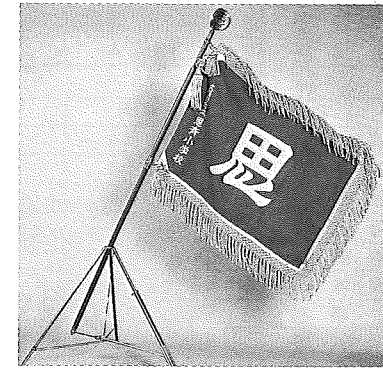
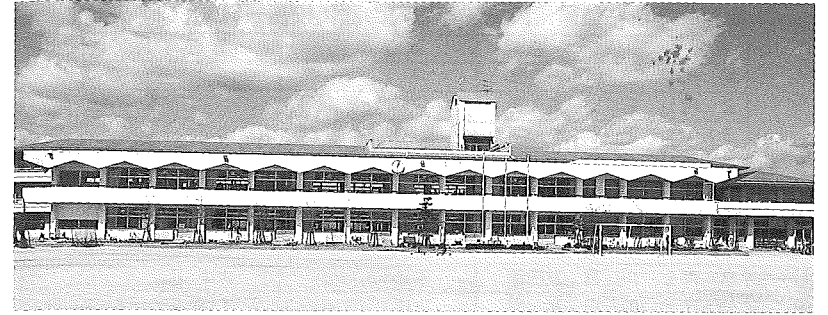
むがたむ ひろまー ちまぢだの
むがたむ ひろまー ちまぢだの

めがとあびて なごせけく
めがとあびて なごせけく

きほひさかえし くぼたむら
いさごとほけみ 花きあがる

あがそがほかに そがえたつ
あがそがほかに そがえたつ

いらかだ われらの しせいこう
むらみ花かむ われらのしせいこう

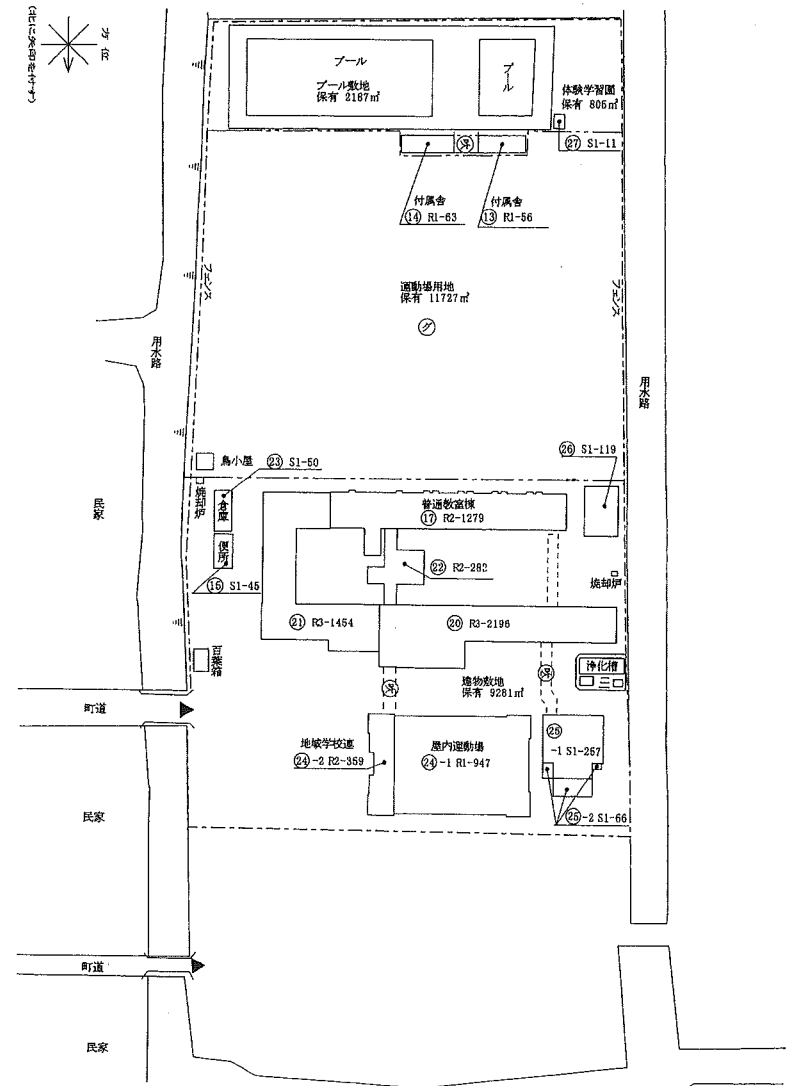
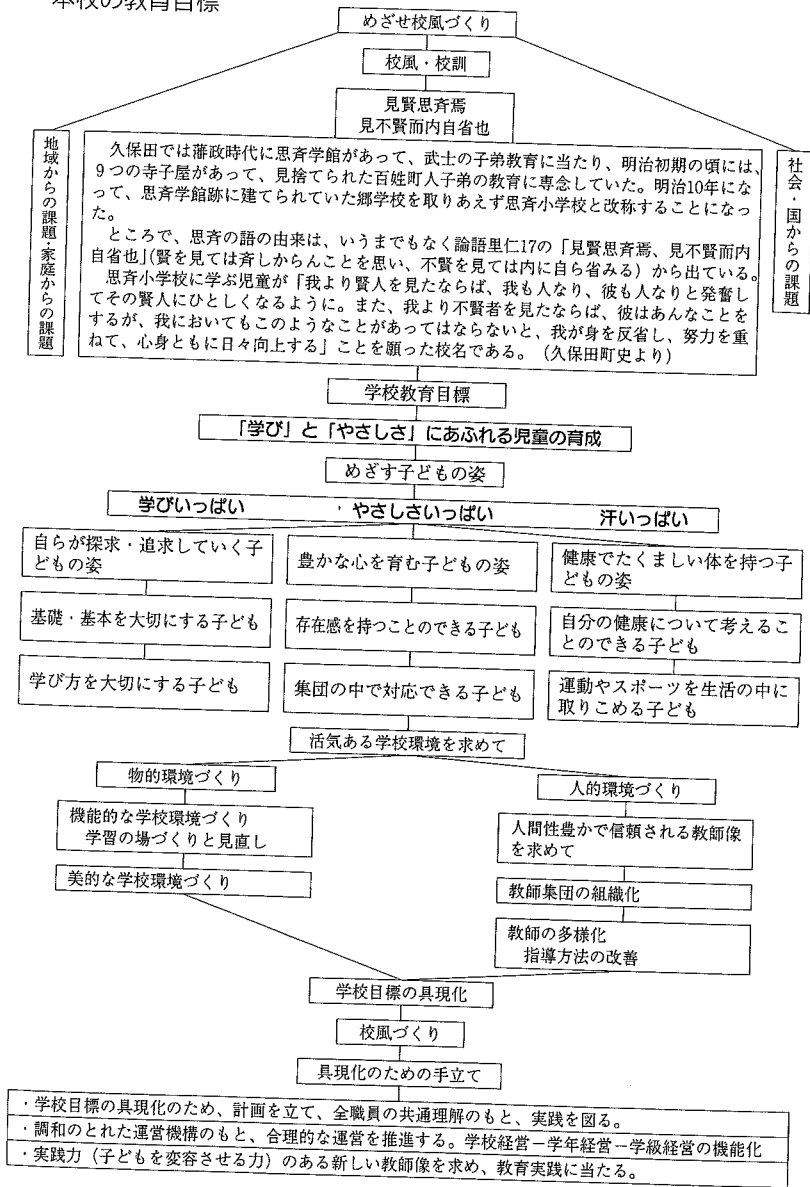


思斉小学校歌

古賀 残星 作詞
安部 幸明 作曲

- 一、菜の花煙る 筑紫野に
いらかの色も 青さびて
歴史は古く ゆかしくも
われらの学び舎思斉校
- 二、天山はるか 朝夕に
平和な姿 仰ぎつつ
心もゆたか 智をみがく
われらの学び舎思斉校
- 三、流れも清き 嘉瀬川の
岸べのはぜも 色燃えて
歌声高く 庭にみつ
われらの学び舎思斉校
- 四、不知火燃ゆる 有明の
潮のかおり 胸にうけ
希望も高く いざ行かん
われらの学び舎思斉校

本校の教育目標

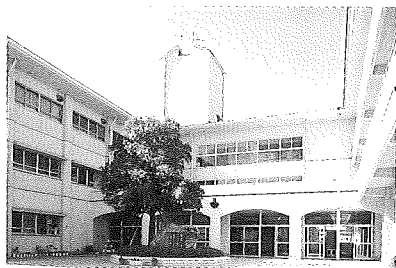


小学校平面図

学校教育

夕 三十二・十
夕 三十一・
夕 三十・三
夕 二十九・九
夕 二十八・十一
夕 二十五・
夕 二十四・
夕 二十三・
夕 二十二・五
夕 二十一・
夕 二十・
夕 十九・
夕 十八・九
夕 十七・
夕 十六・二
夕 十五・
夕 十四・
夕 十三・
夕 十二・
夕 十一・
夕 十・
夕 九・
夕 八・
夕 七・
夕 六・
夕 五・
夕 四・
夕 三・
夕 二・
夕 一・

移動教室制を実施、生徒会発足、学校用電話設置。(六月)
県指定学校図書館研究発表。
講堂改築、校長室移転、家事室裁縫室拡張
北校舎落成式、婦人会よりピアノ寄贈。
台風一〇周年記念式典・文化祭・記念誌発行。中学校単独
の体育祭実施。
新校舎竣工
ミルク給食開始
九州地区学校図書館表彰。給食室完成(十月) 完全給食開始(十一月)



中学校玄関

思斉中学校沿革

昭和二十二・五

久保田村立思斉中学校創立 校長御厨勘市、教職員一七名、八学級生徒数三〇七名
校防火自衛団を組織、PTA発会式。

夕 二十三・

佐賀軍政部教育官フランク・バーツ氏来校、学校調査を行なう。
全校生徒より校章を募集、校内文芸会開催。

夕 二十四・

天皇本県巡幸に奉送迎する。台風襲来(ジュディス)床上浸水一・五メートル書類その
他に被害あり。校歌を全校生徒より募集。県下中学校排球大会で男子チーム優勝。

夕 二十五・

移動教室制を実施、生徒会発足、学校用電話設置。(六月)

夕 二十八・十一

講堂改築、校長室移転、家事室裁縫室拡張

夕 三十・三

北校舎落成式、婦人会よりピアノ寄贈。

夕 三十一・

台風一〇周年記念式典・文化祭・記念誌発行。中学校単独
の体育祭実施。

夕 三十六・二

新校舎竣工
ミルク給食開始

九州地区学校図書館表彰。給食室完成(十月) 完全給食開始(十一月)

思斉小学校教職員数

平成13年4月1日現在

校長	1	} 基準配当数19学級 26名
教頭	1	
教諭	21	
養護教諭	1	
栄養職員	1	
事務長	1	
加配教諭	3	
合計	29名 (県費負担教職員)	

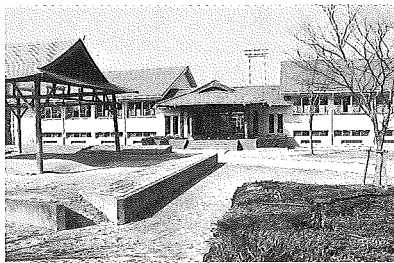
児童数

平成13年4月1日現在

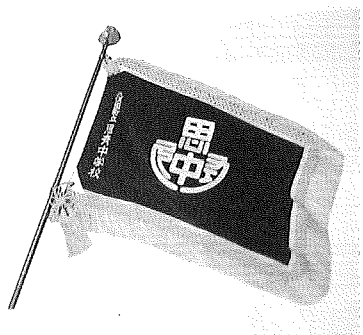
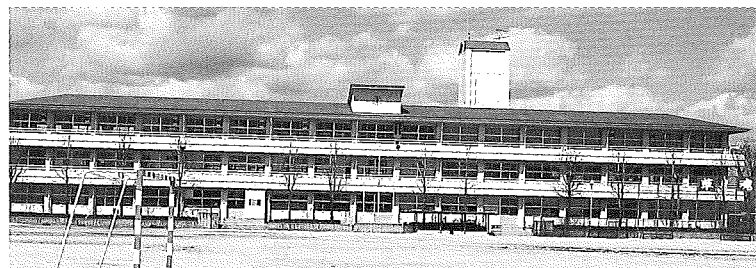
学年	男	女	計	学級数
1	60	50	110	3
2	42	52	94	3
3	63	52	115	3
4	41	51	92	3
5	58	42	100	3
6	40	50	90	3
特殊学級	3	4	7	1
計	307	301	608	19

- 夕 五十三・四 県教委より「教育工学」の研究委嘱を受ける。全教室に〇（十一月）
- 夕 五十二・五 術室準備室新設。西橋梁工事完了。交通安全宣言碑建立。
- 夕 五十一・九 校旗制定・披露式。運動場緑化。中庭自転車小屋新設。
- 夕 四十九・三 視聴覚教室の整備（VTR設備）
- 夕 四十八・三 運動場完成。小中学校兼用プール落成（十一月）
- 夕 四十七・六 相撲場建設。放送研究発表会。進路指導研究発表会。
- 夕 四十六・四 放送教育研究指定（NHK）職員便所増設。
- 夕 四十五・三 小運動場造成、婦人会ピアノ寄贈、福地文吾氏親子時計寄贈。
- 夕 四十四・三 体育館落成。体育倉庫・部室新設。特殊学級増設。（四月）
- 夕 四十二・四 創立二十周年記念式典・体育祭実施。
- 夕 四十二・二 県教委より特別活動研究委嘱、特殊学級新設。
- 夕 四十一・十二 講堂改築、西便所新築。
- 昭和四十一・一 県青少年スポーツ大会で柔道優勝
- 夕 五十四・十一 HP設置。体育館外壁用時計設置。職員室の親時計設置。職員用机購入。
- 夕 五十五・四 県教委指定「教育工学」研究発表会「学習の効率化をめざす指導過程の研究」放送室（スタジオ、調整室）の拡充と全教室テレビの設置。LL教室の新設（国庫補助）
- 夕 五十六・二 同和教育推進地区指定（文部省）学校園「丸い池のある庭」完成。（七月）
- 夕 五十七・二 西倉庫改築。県放送教育研究大会（中学校部）会場となる。運動場改修整備。火災事故発生（二月十三日）技術室・北便所・柔道場消失。
- 夕 六十・十一 技術室新設、特別教室改修、理科教室机設置。
- 夕 六十一・四 新校舎竣工。
- 夕 六十二・十 技術室新築。
- 夕 六十三・四 文部省・県教委委嘱「教育機器（LL）利用英語教育研究発表表。
- 平成 元・十二 自転車小屋・部室・百葉箱設置。
- 夕 二・二 武道館完成
- 夕 三・一 中学校への並木道（インターロッキング張り）竣工。
- 夕 四 職員住宅完成（八月）AET（デエイビット・サンティリ）赴任。パソコン教室設備（十月）
- 夕 三・一 卓球場完成。パソコン教室空調設備（二月）、駐車場舗装整備（三月）
- 夕 四 文部省道徳教育推進校に指定。体育館・武道場・管理棟改修工事。（十一月）

- 夕 五十三・四 県教委より「教育工学」の研究委嘱を受ける。全教室に〇（十一月）
- 夕 五十二・五 術室準備室新設。西橋梁工事完了。交通安全宣言碑建立。
- 夕 五十一・九 校旗制定・披露式。運動場緑化。中庭自転車小屋新設。
- 夕 四十九・三 視聴覚教室の整備（VTR設備）
- 夕 四十八・三 運動場完成。小中学校兼用プール落成（十一月）
- 夕 四十七・六 相撲場建設。放送研究発表会。進路指導研究発表会。
- 夕 四十六・四 放送教育研究指定（NHK）職員便所増設。
- 夕 四十五・三 小運動場造成、婦人会ピアノ寄贈、福地文吾氏親子時計寄贈。
- 夕 四十四・三 体育館落成。体育倉庫・部室新設。特殊学級増設。（四月）
- 夕 四十二・四 創立二十周年記念式典・体育祭実施。
- 夕 四十二・二 県教委より特別活動研究委嘱、特殊学級新設。
- 夕 四十一・十二 講堂改築、西便所新築。
- 昭和四十一・一 県青少年スポーツ大会で柔道優勝
- 渡り廊下新築。郡中体で柔道・女子バレー優勝

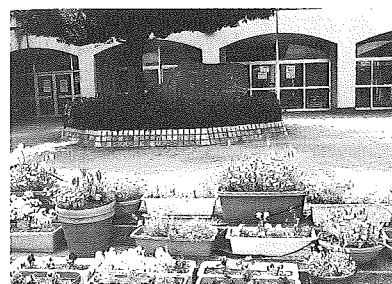


武道館



歴代校長一覧

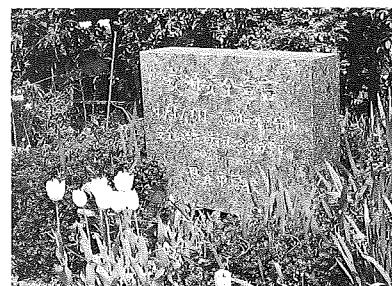
職名	氏名	就任年月	退任年月
初代	御厨 勤市	昭和22. 4	昭和24. 3
2代	林 敬直	昭和24. 3	昭和26. 9
3代	久保田 高嶺	昭和26. 9	昭和28. 3
4代	合瀬 藤雄	昭和28. 3	昭和34. 3
5代	宮崎 恒治	昭和34. 4	昭和39. 10
6代	吉村 又男	昭和39. 11	昭和44. 3
7代	力久 重雄	昭和44. 4	昭和48. 3
8代	副島 虎雄	昭和48. 4	昭和52. 3
9代	中野 和	昭和52. 4	昭和57. 3
10代	北村 要之	昭和57. 4	昭和59. 3
11代	山田 實	昭和59. 4	昭和61. 3
12代	玉澤 豊	昭和61. 4	昭和62. 3
13代	小柳 輝彦	昭和62. 4	平成 元. 3
14代	陣内 寛孝	平成 元. 4	平成 3. 3
15代	高園 五郎	平成 3. 4	平成 6. 3
16代	吉末 誠介	平成 6. 4	平成 8. 3
17代	田中 一利	平成 8. 4	平成10. 3
18代	井上 武夫	平成10. 4	現在に至る



玄関と花

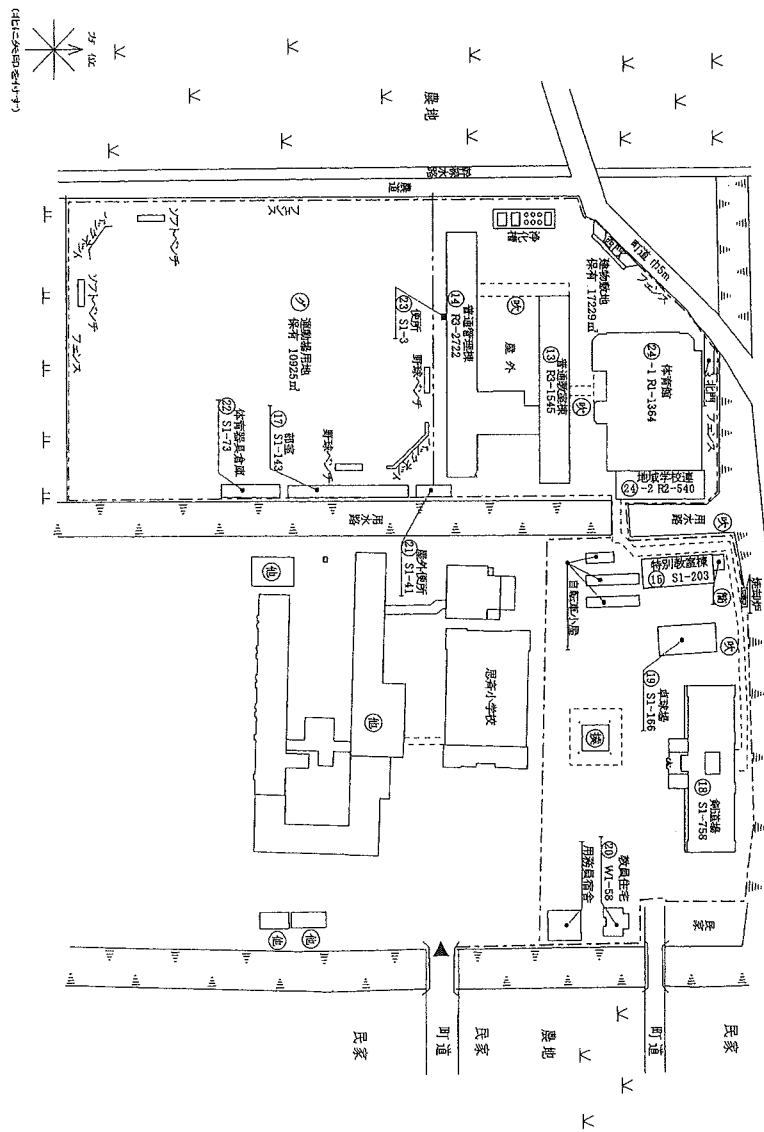


女子バレーボール部



交通安全宣言碑

- 夕 四・三 校内水路施設整備。A L T 招聘（八月）文部省指定道德教育研究発表（十一月）
- 夕 六・十二 図書館管理システム設置。
- 夕 八・四 特殊学級新設。障害者用トイレ、手摺り各階設置（八月）。文部省心身障害児理解推進教育研究発表（十月）
- 夕 九・三 保健室トイレ設置。（十月）
- 夕 十・二 新体育館竣工。防犯ブザー贈呈式。体育館に油絵寄贈（婦人会）体育館竣工式。（五月）
- 夕 十一・七 一年スライダー黒板設置。パソコン機種入れ替え、校内LAN設置、卓球場改修（八月）
- 夕 十二・四 佐賀県小・中連携教育推進モデル事業指定。多目的教室床改修工事（七月）



中学校平面図

校 歌

中尾理子 作詞
原岡研一 作曲

明朗に、荘重さを失うことなく

mf

た か ま ち と く を て ん ざ ん の

> > > >

げ ん た る す が た に も と め う ー つ

mp

と も に み が ま て よ の ち り き

> >

う ち は ら わ ん と お お し く も

ff

ら か い て た て る ま な び や は

f

こ れ ぞ わ れ ら が し せ い ち ゅ う

- 一、高き知徳を天山の
巖たる姿に求めつつ
共にみがきて世の塵を
打ち払わんと雄々しくも
誓いて建てる学び舎は
之ぞ我等が思斉中
- 二、今や世界に鳴りひびく
自由を告ぐる明けの鐘
高き理想に生きるべく
真理はもゆる不知火の
海の潮の湧くところ
之ぞ我等が思斉中
- 三、筑紫平野に風かおる
みのり豊けきこの里に
文化の基打ちたてて
世界に誇る日の本の
再びおこす学び舎は
之ぞ我等が思斉中
- 四、愛と正義を掲げつつ
やがて来るべき新生の
民主日本を背負いゆく
栄光輝くこの門出
永久に幸ある学舎は
之ぞ我等が思斉中

思斉中学校教職員数

平成13年4月1日現在

校長	1	} 基準配当数10学級 20名
教頭	1	
教諭	16	
養護教諭	1	
事務長	1	
加配教諭	3	
合計	23名 (県費負担教職員)	

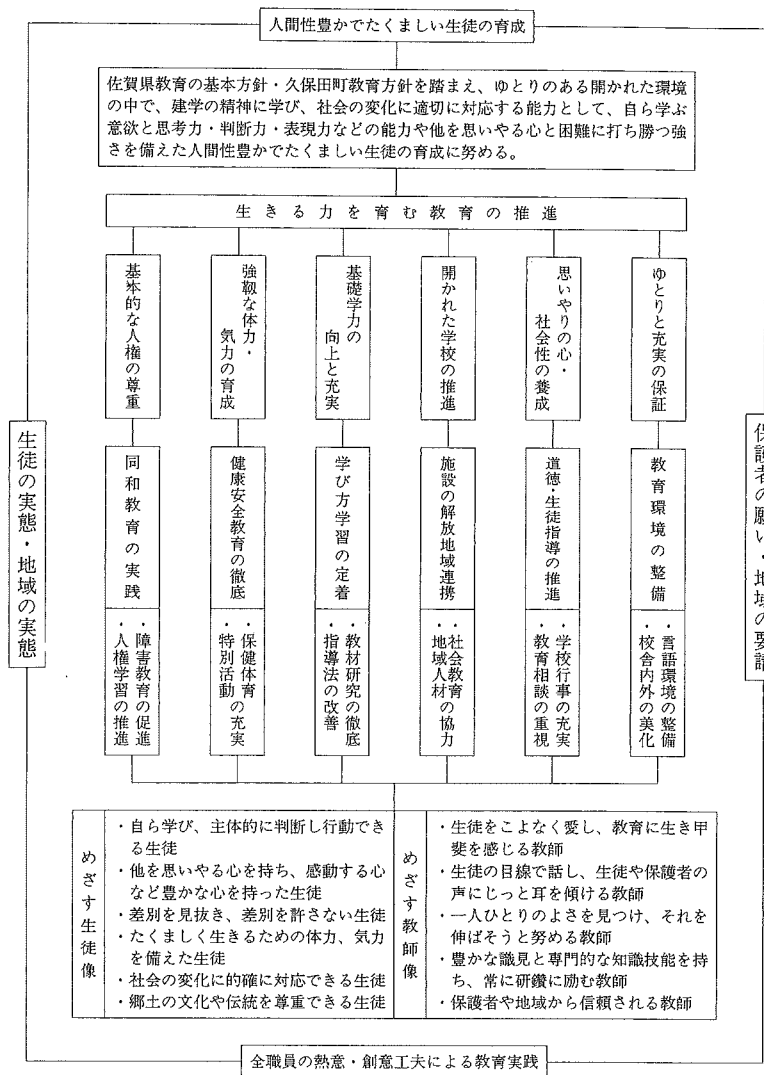
* 生徒数 (H13. 4. 11現)

学年	男	女	計	学級数
1年	39	53	92	3
2年	68	52	120	3
3年	51	54	105	3
特殊学級	3	0	3	1
計	161	159	320	10

* 進路動向

	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年
進学者	107	116	127	107	108
就職(就職進学も含む)	0	1	1	3	0
自家・自営	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0
	107	117	128	110	108

本校の教育目標



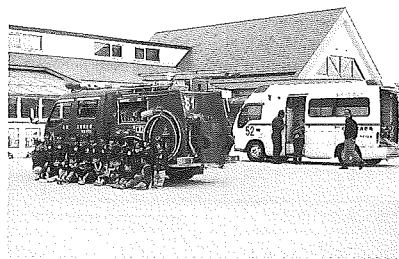
(五) 幼児教育

学校法人慈光学園 久保田幼稚園

幼稚園沿革

昭和二十八年十一月 久保田村長村田隆長より幼稚園設置についての要請を受けた石丸正光は、村議会に陳情、議会の協力を得る。

- 夕二十九年 一月十日 開園 定員八〇名 五歳児二学級 仮園舎として本能寺の本堂・庫裏を使用
- 夕夕年 一月十一日 佐賀県知事 幼稚園設置認可
- 夕夕年 七月 園舎第一次工事 保育室 職員室
- 夕夕年 十月 園舎第二次工事 保育室 遊戯室
- 夕夕年 十一月 定員一二〇名 四学級
- 夕三十年 九月 園舎第三次工事 保育室
- 夕三十八年 七月 民家買収 園舎第四次工事 保育室
- 夕四十二年十一月 九州地区私立幼稚園教育研修大会において、分科会社会の資料提供と発表(小倉)
- 夕四十五年十一月 同 上 (宮崎)



園舎と消防車

幼児教育

- 夕五十一年 七月 給食室竣工
- 夕五十四年 八月 幼稚園教育課程研修集会において、資料提供と発表。全国大会(東京)に参加
- 夕五十六年 三月 定員一五〇名認可
- 夕夕年 八月 園舎改築 六六平方尺
- 夕夕年 十二月 学校法人慈光学園設立認可 理事長 石丸正光 久保田幼稚園園長 石丸正子
- 夕五十七年十一月 久保田幼稚園創立三〇周年記念式典を、久保田町農村環境改善センターで挙行
- 夕五十九年 七月 園舎移転総合改築計画による第一次敷地として隣接田八三七平方尺を買収する
- 夕六十一年 三月 同 上 第二次敷地 三、〇七五平方尺を買収する
- 夕夕年 十二月 新園舎竣工 鉄骨床面積一、〇五六平方尺建築面積九〇六平方尺旧園舎木造音楽室五
- 夕六十二年 六月 プール竣工 (鉄筋コンクリート タイル張り 地上型水槽四尺×八尺) 面積一〇九、六平方尺
- 平成 二年 三月 文部省初等中等教育局幼稚園課調査実地状視察
- 夕 四年十一月 久保田幼稚園創立四〇周年記念式典を本園にて挙行
- 夕 五年 十月 平成五年度学校基本調査優秀と認められ文部大臣表彰
- 夕 六年 十月 平成六年度幼稚園計画訪問 学校教育課・総務学事課
- 夕 八年 八月 園舎増改築二七平方尺遊戯室を一部改造し保育室とする 学習園を除去し駐車場とす

十年 四月 久保田幼稚園園長に古賀研二氏就任
 十年 九月 久保田幼稚園創立四五周年記念像建立および記念式典を本園にて挙行
 十年 十月 理事長石丸正光氏逝去により 新理事長に石丸哲朗氏就任
 十三年 三月 少子化対策の補助を受け、通園バスを買い替える。

① 教育方針

人間尊重の精神を基本として、宗教に基づいた情操教育による、思いやりのある個性豊かで健全な心身の基礎の育成に努める。

② 教育の目標

- 期待する幼児像
- 「明るく、たくましい子ども」
 - 基本的生活習慣が身についた子ども
 - やる気を持つ子ども
 - 思いやりのある子ども
 - がまん強い子ども
 - 感謝の心を持つ子ども
 - 健康な子ども



おゆうぎ会

施設の概要

*園 地		*園 舎	
敷地面積	三・九一三・〇〇平方メートル	保育室面積	三二四・一八平方メートル
建築	九五七・五八平方メートル	遊戯室	一一七・〇〇平方メートル
床	一・一〇〇・五一平方メートル	職員室	四八・八五平方メートル
延床	八四三・九二平方メートル	その他	六一〇・四八平方メートル
運動場	二・八一七・三四平方メートル	床面積合計	一・一〇〇・五一平方メートル

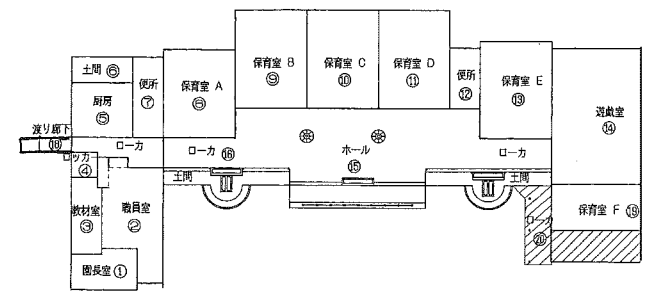
*教職員

園 長	古賀 研二	運転士	一名
副園長	一名	教育補助員	一名
教 諭	五名	調 理	二名
事 務	二名		

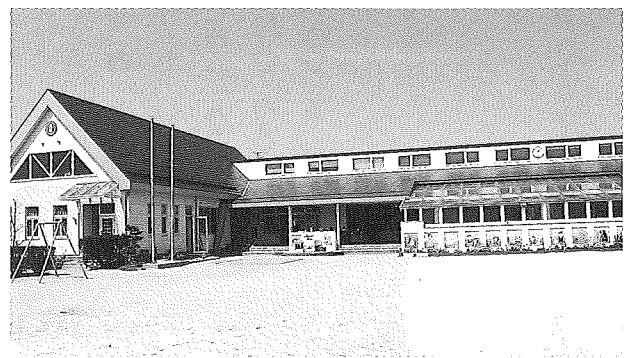
幼児教育
園児数の推移

五 歳	平成七年度	八年度	九年度	十年度	十一年度	十二年度	十三年度
	五七	六五	五七	七一	四五	六八	四五

計	三	四	五	六	七	八	九	十
	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳
	一四六	三一	五八	一六〇	四五	五〇	一五一	二二
	一五二	二二	七二	一五五	四〇	四四	一三八	二五
	一三四	二四	四二	一三四	二四	四二	一三四	二四
	一一四	二二	四七	一一四	二二	四七	一一四	二二



久保田幼稚園平面図



久保田幼稚園舎

(六) 社会教育

概説

昭和二十四年六月十日、「社会教育法」が公布され、戦後の社会教育に新しく法的根拠をもつようになった。この法律の意義は、教育基本法第七条の精神にのっとり、社会教育に関する国および地方公共団体の責任とその限界を明白にしたものである。すなわち国および地方公共団体の社会教育に対する役割は、すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自ら実生活に即する文化的教養を高めるような環境を醸成することであった。また、社会教育団体の性格を明らかにし、さらに教育委員会に諮問や助言機関として社会教育委員をおくことにした。

社会教育法 昭和二十四・六・十法律第二〇七号、第一五条の規定に基づき、久保田町社会教育委員条例昭和四十五年三月十二日条例第一二号によって、社会教育委員を置く。

社会教育委員 (平成十三年度)

社会教育	役職	住所	就任期間
中野 和	学識経験者	久保田宿	平成十三・五・一〜平成十五・四・三十
蘭 和子	町婦人会会長		

江頭 敏男 小学校校長 思斉小学校 平成十三・五・一〜平成十五・四・三十
 井上 武夫 中学校校長 思斉中学校
 下平 裕之 町こどもクラブ連絡協議会長 町西
 満岡 保徳 小学校PTA会長 町東
 西岡 正博 中学校PTA会長 横江
 大野 幸治 町高校生保護者連絡協議会長 福島
 中島 常德 町青年団長 北田

歴代社会教育委員

福岡勇四郎 力久 重雄 香田 久栗 中尾 亨 立野 久吾 昭和四十五・十二・一〜昭和四十九・十二・三十一
 山岡 竹次 金田 保森 四郎 古賀 好枝 木村 正幸
 立野 久吾 金田 保木村 正幸 今泉 辰国 塚本 トヨ 昭和五十・一・一〜昭和五十二・四・三十
 中野 茂康 古賀 好枝 篠崎 規 副島 虎雄 船津 四郎
 早田 初義 中野 和 佐保 誠 木村 正幸 高原シツエ 昭和五十二・五・一〜昭和五十四・四・三十
 中野 清人 金田 保 永松 憲治 堤 松次
 福井 知男 中野 和 佐保 誠 西村達五郎 高原シツエ 昭和五十四・五・一〜昭和五十六・四・三十
 向嶋 作次 山岡 竹次 金田 保 堤 松次

社会教育

山田 實 中野 和 山崎 吉幸 白濱 壽 満岡 郁夫 昭和五十六・五・一〜昭和五十八・四・三十
 高原シツエ 鶴丸 弘二 山岡 竹次 古賀 友芳 堤 松次
 北村 要之 昭和五十七・四・一〜昭和五十八・四・三十
 香月 政利
 山田 實 北村 要之 山崎 吉幸 高原シツエ 山岡 竹次 昭和五十八・五・一〜昭和六十・四・三十
 志津田和己 香月 政利 江越 福吉 古賀 友芳 関 咸一
 永瀬 義明 香川 治義 昭和五十九・四・一
 平安寺 扶 山田 實 倉本 一美 山崎 吉幸 香川 治義 昭和六十・五・一〜昭和六十二・四・三十
 高原シツエ 山岡 竹次 古賀 友芳 関 咸一 陣内 秀則
 玉澤 豊 香月 郁夫 昭和六十一・五・一
 平安寺 扶 小柳 輝彦 船津 幸男 香月 郁夫 高原シツエ 昭和六十二・五・一〜昭和六十四・四・三十
 香川 治義 満岡 保徳 下平 裕之 古賀 友芳 関 咸一
 高原 義行 昭和六十三・五・一〜昭和六十四・四・一
 儀間 厚 陣内 寛孝 船津丸幸男 高原 義行 香月 郁夫 平成 元・五・一〜平成 三・四・三十
 塚原 正幸 下平 裕之 古賀 友芳 関 咸一
 金田 保 平成 二・五・一
 儀間 厚 高園 五郎 弥永 峯雄 夏秋 道博 高原シツエ 平成 三・五・一〜平成 五・四・三十

陣内 敏實	塚原 正幸	下平 裕之	古賀 友芳	古賀 清吉	平成 三・五・一	〓平成 五・四・三十
高園 五郎	夏秋 道博	夏秋 博隆	高原シヅエ	志津田和己	平成 五・五・一	〓平成 七・四・三十
下平 裕之	永瀬 義明	古賀 清吉	江口 保則	瀬口 昭彦	〓	〓
吉末 誠介	中野 清人	高田 智貴			平成 六・五・一	〓
吉末 誠介	瀬口 昭彦	西岡 正博	夏秋 道博	高原シヅエ	平成 七・五・一	〓平成 九・四・三十
志津田和己	中野 拓弥	下平 裕之	永瀬 義明	古賀 清吉	〓	〓
田中 一利	西 保博	蘭 和子	小柳 博行		平成 八・五・一	〓
古賀 淳一	田中 一利	西岡 秀男	中野 清人	蘭 和子	平成 九・五・一	〓平成十一・四・三十
小柳 博行	中野 拓弥	下平 裕之	永瀬 義明	古賀 清吉	〓	〓
井上 武夫					平成 十・四・一	〓
古賀 淳一	井上 武夫	西岡 秀男	中野 清人	蘭 和子	平成十一・五・一	〓平成十三・四・三十
大野 幸治	小川伊佐緒	下平 裕之			〓	〓
永瀬 義明					〓平成十一・	
中野 和					〓	〓平成十三・四・三十
江頭 敏男	西岡 正博	向島 作次			平成十二・五・一	〓平成十四・四・三十
中野 和	蘭 和子	江頭 敏男	井上 武夫	下平 裕之	平成十三・五・一	〓平成十五・四・三十
満岡 保徳	西岡 正博	大野 幸治	中島 常徳		平成十三・五・一	〓平成十五・四・三十

社会教育に対する基本的な考え

生涯学習の振興

公民館を生涯学習とコミュニティ活動の拠点として位置づけ、コミュニティ組織と連携して生涯学習の振興を図る。

関係施設・設備の充実、整備を図る。

学習機会の拡充とサークル活動の育成、指導者の育成確保。

地域活動の推進・活性化

地域活動の拠点となる部落公民館施設、設備及び組織の整備充実を図る。

地域の教育力の向上を推進するための指導者の養成、ボランティア活動の活性化、

地域の連帯感の強化を図る。

地域・家庭・行政・学校等の連携強化による、久保田の明日を担う大切な青少年

の健全育成を図る。

文化活動の振興

町民の自主的な幅広い文化活動を支援し、町の地域文化の振興を図る。

文化活動拠点の整備、イベントの充実等を通じ、文化サークル活動の支援・育成

を図る。

町の歴史、文化遺産の保全、再発見とその活用を図る。



華菱太鼓

スポーツの振興

余暇時間の増大、高齢社会を迎えるなかで、施設・設備の整備を進め、生涯学習の一環としての継続的なスポーツ・レクリエーション活動の充実を推進し、町民の健康の維持・増進をはかる。

地域スポーツ・レクリエーション活動の普及を通じ、町民相互の心のふれあいと融和を図る。

人権・同和教育の継続的実践

二十一世紀は、人権の世紀といわれているなかで、町はあらゆる差別をなくすことを目指し、引き続き積極的に人権・同和教育の推進を図る。

町民の人権意識の高揚を推進するため、人権・社会同和教育指導者の育成と、人権・社会同和教育推進体制の充実を図る。

学社連携による人権・同和教育の充実推進を図る。

公民館・社会教育事業

成人教育

家庭教育の推進

幼児の保護者を対象にした教室の開催 「家庭の日」の推進 幼稚園・保育園で講話

高齢者教育の推進

「思斉館大学」講座の開催 講話・実技・社会探訪 年一〇回

部落公民館活動の推進

部落公民館長会の開催 年三回 部落レクリエーション大会の援助

人権教育の推進

「共に生きる」人権学習講座 年五回 講話・映画、

「明るい町づくり映画の集い」六部落 映画・講話 六月～十二月

生涯学習フェスティバルの開催

毎年二月 意見発表 講演会等 参加者（町民・社会教育関係者）

英会話教室

中学校ALITによる、小学生以上の町民対象 週一回夜間

パソコン教室 対象 三〇〇名

婦人教育

婦人学級

町婦人会への委託事業、対象 役員・支部長、講話・実習等

生活会議

婦人会員のグループで、生活改善・環境浄化などに活動する団体への支援、講演・実習

青少年教育

子どもクラブ・思斉小スポーツクラブ振興会・高校生保護者連絡会・小中学校PTA活動の指導・援助



大正琴教室

文化事業

文化財保護事業

文化財保護審議会 年三回、埋蔵文化財の発掘調査、文化財防火訓練

文化協会の育成

サークル活動の支援、協会事業の広報支援。

町文化祭の開催 毎年十一月 町総合センター

図書室の活用

図書貸し出しのコンピューター管理、図書の整備充実・新刊紹介、生涯学習情報提供

その他の事業

成人式の開催 一月、教育広報発行 年三回

学校週五日制の実施に伴い、小中学校の指導要領の改訂が行われ、総合学習の時間が設けられた。これに対応するために学校では、教職員の一層の研修が必要となり、今まで以上に地域の環境・実態に即した学習内容が求められることになった。

学校の教科内容にも変化がみられ、特に音楽などは今までになかった「邦楽」の分野が導入されるなど、日本の古典音楽も学習することになった。これに伴う指導者も広く学校内外に依頼せざるを得なくなる。



文化祭

これは、学校はもちろん地域の文化、指導能力が問われることにもなる。

1 公民館

概説

戦後、公民館建設に異常なまで熱意を示したのは、連合軍総司令部（GHQ）民間情報局（CIE）であった。佐賀軍政部では、公民館の設置は、日本民主化の拠点として強力な指導を行なった。佐賀県では、軍政部教育官フランク・バーツ氏が指導に当たり、各市町村を巡回指導した。

①「日本の民主化は公民館から」と、その施設・設備に熱意を示した。②ナトコ映写機を始め視聴覚機材を貸与し、県内くまなく巡回映画を実施し、映画による占領政策の徹底を図った。③青少年に優良図書の提供・斡旋に努めた。④国民の知る権利として広報活動を指示した。⑤青年団体の民主的運営・青年学級の設置促進を図った。また、各地に社会教育研究大会を開催させ、研究会では新しい民主主義や、新しい社会教育の理念を普及しようとした。

社会教育

昭和二十一年七月五日、文部次官通牒「公民館設置運営二関スル件」が本県にも寄せられて、歴史的な社会教育の第一歩を踏み出した。久保田では、はじめ村田隆長村長が公民館長事務取り扱いを兼務していたが、昭和二十五年四月一日、久保田村公民館として村立思斉中学校敷地内、旧青年学校柔道場内に事務所を置き、初代館長に古賀了が就任した。

歴代町公民館長

- 初代 古賀 了 (四ヵ月) 昭和二十二年四月一日〜同年七月三十一日
- 第二代 光山 覺禪 (二年十ヵ月) 昭和二十五年八月一日〜昭和二十七年五月三十一日
- 第三代 中島 松治 (九年十ヵ月) 昭和二十七年六月一日〜昭和二十七年三月三十一日
- 第四代 陣内 熊雄 (七年) 昭和二十七年四月一日〜昭和四十四年三月三十一日
- 第五代 古賀 二男 (六年) 昭和四十四年四月一日〜昭和五十年三月三十一日
- 第六代 小寺 一郎 (四年五ヵ月) 昭和五十年四月一日〜同年四月三十日小寺一郎氏館長職務代理者
昭和五十一年五月一日〜昭和五十四年九月三十日
- 第七代 堤 善正 (五年六ヵ月) 昭和五十四年十月一日〜昭和六十年三月三十一日
堤善正氏 教育長兼務
- 第八代 中野 和 (一年) 昭和六十一年四月一日〜平成八年三月三十一日
- 第九代 大久保 強 (四年) 平成八年四月一日〜平成十二年三月三十一日
- 第十代 荒木 正次 (二年) 平成十二年四月一日〜 至現在

久保田町公民館の建設

久保田町公民館の建設に至まで、中学校の校地・校舎内を転々とし、昭和十七年鶴丸廣太郎氏寄贈の武道場に事務所を置き、成人教育や青年団員のより所となっていたが、中学校の校舎建築に伴い、再び校舎の一部を仮事務にするなど、社会教育の最前線で重要な役割を果たす公民館が、恵まれない環境に置かれたことは残念であ

った。

ようやく村民待望の公民館建設の気運が高まり、昭和四十一年七月建設促進委員会が設置された。

建設経過

- 昭和四十一・七 公民館運営審議会の中に建設促進委員会設置、土地購入交渉開始。
- 〳 四十二・三 土地購入、敷地造成着工
- 〳 〳 〳 敷地造成完了、設計委託
- 〳 〳 〳 競争入札会により株式会社中島建設に落札、請負契約を締結。
- 〳 〳 〳 起工式
- 〳 〳 〳 着工
- 〳 四十三・三・三十 完成 久保田町公民館落成 昭和四十三年四月二十六日

落成式 県教育委員会社会教育課長白浜春次氏外町内関係者多数。

相撲甚句 (町東) 面浮立 (上新ヶ江)

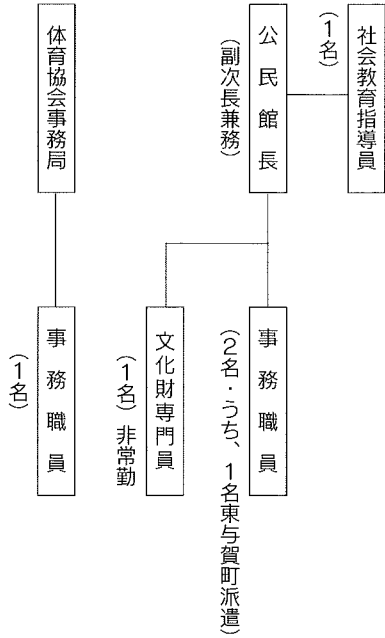
建設経費 (単位千円)

木工事費	一八、九四〇	国庫補助金	三、〇〇〇
電気工事費	九二四	町 債	九、三〇〇
給排水工事費	二、一〇六	一般財源他	一四、六八一
設計監督委託料	六〇〇	合 計	二六、九八一
		財 源	

社会教育

公民館分館第一号草木田
 村公民館の昭和二十五年事業目標に分館の設置運動を掲げ、部落懇談会を続けていたが、九月十日トップを切って草木田分館が誕生した。同分館では即日納税準備預金を十五日から実施することを申し合わせ、さらに二十日には全部落民が地方税法の話や聴くことになった。なお、発会当日は村公民館の光山館長と主事が出席し、館長の講演および主事の新憲法の話をし、明るい部落づくりを激励した。同部落の時間励行はとくに素晴らしかった。

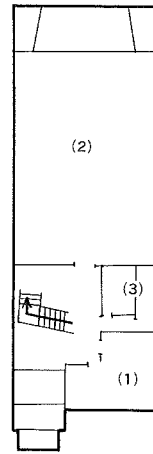
公民館分館第一号草木田



昭和43年4月久保田町公民館落成

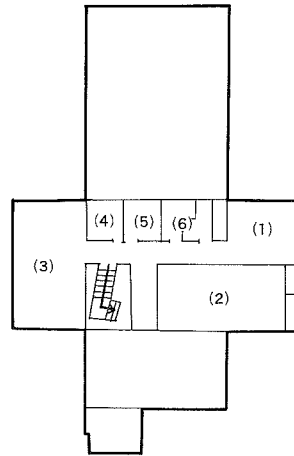
久保田町公民館職員体制（平成十三年四月一日現在）

平面図



1階

1. 事務室	31.25㎡
2. 講堂	180.00㎡
3. 便所	15.75㎡
ロビー他	52.00㎡
計	279.50㎡



2階

1. 第一会議室	22.50㎡
2. 第二会議室(和)	45.00㎡
3. 家事研究室	45.00㎡
4. 団体室(1)	7.30㎡
5. 〃(2)	7.30㎡
6. 便所	12.00㎡
その他	41.26㎡
計	180.36㎡
合計	459.860㎡

備品費	二、一七七	・構造
土地造成費(土地代金)	二、一〇〇	一階 事務室・講堂・ロビー・便所
その他の経費	一三四	二階 第一会議室・第二会議室(和室)・家事研究室
合計	二六、九八一	団体室(一)(二)・便所他

役員	分館長	石丸 量山	運営委員	志波 徳市	志波 なみ
	厚生部長	江口 慈徳		末永 広吉	中尾由太郎
	教養シ	林 仙宗		楠田 村吉	楠田 恒雄
	産業部長	小野 喜六		木下 末男	原田 保雄
	体育シ	西岡 春次		馬渡 兼子	中尾 春江

部落公民館施設の充実

部落公民館を新築または、増改築をする場合、部落長等が町教育委員会を経由して町長へ、部落公民館施設整備費交付申請書を提出すれば、予算の範囲内で補助金の交付を受けることができる。(平成五年三月二十五日規則第一九号)

補助金の交付を受けた公民館

平成五年度	上恒安	木造平屋	一〇四、平方	一〇、九一二、〇五〇円	三、三八三、〇〇〇円
シ	北田	シ	一二五、八七平方	一五、三六五、三九五円	四、〇九四、〇〇〇円
シ	草木田	シ	一〇三、三八平方	一三、四〇〇、〇〇〇円	三、五七三、〇〇〇円
シ	搦東	屋根葺替	一一四、〇〇平方	七四九、二四〇円	八三、〇〇〇円

事業費

補助金



現在の草木田公民館

シ	搦西	木造平屋	一四三、一四平方	一六、六〇〇、〇〇〇円	四、八六二、〇〇〇円
シ	大立野東	シ	一〇四、三四平方	一一、九六七、五二五円	三、六二四、〇〇〇円
シ	町東	シ	七四、五二平方	九、三二〇、〇〇〇円	二、六一五、〇〇〇円
シ	小路	シ	一一九、二八平方	一七、〇四五、〇〇〇円	四、一八六、〇〇〇円
シ	永里	便所等改修	三、六一平方	一、〇五〇、〇〇〇円	一八三、〇〇〇円
シ	下新ヶ江	シ	一五六、四〇平方	一九、九八四、〇〇〇円	四、九一四、〇〇〇円
シ	久富西	玄関等改修	九、九三平方	一、二七〇、〇八七円	一八二、〇〇〇円
シ	徳久	外壁改修	五二、一三平方	九七三、九八五円	一五七、〇〇〇円

2 人権・同和教育

終戦後、日本国憲法や教育基本法の理念にたてば、部落解放は実現できるといふ考えから一部の地方では同和教育は下火になった。しかし、未解放部落の子供達の長欠、不就学の実態や、義務教育無償の実質化の立場からも部落解放運動、同和教育が強く叫ばれるようになった。

昭和二十八年、部落解放をめざす同和教育の全国的機関として「全国同和教育研究協議会」が結成された。昭和四十年同和对策審議会答申が出され、その精神を受けて昭和四十四年七月、「同和对策事業特別措置法」が成立した。同法は同和对策の具体的方策を掲げ、同和教育が部落問題解決のための重要な柱として位置づけられるよ

うになった。

佐賀県における同和教育の歩みをみると、昭和四十四年度から「同和教育推進委員」県単教職員として特別配置されている。昭和四十五年十一月に佐賀県同和教育研究会、同四十九年四月には佐賀県社会同和教育研究会が発足した。昭和四十六年から、佐賀県同和教育研究大会が毎年開催され、今日に至っている。

教育集会所の設置

久保田町では、昭和五十四年三月十二日条例第四号により、同和地区及びその近隣の住民の教育水準の向上と福祉の増進を図るため、久保田町立教育集会所の設置及び管理に関する条例を定め、教育委員会が管理することになった。

名称 久保田町立教育集会所
位置 久保田町大字久保田三八九番地

人権・同和教育の推進

二十一世紀は人権の世紀といわれているが、町ではあらゆる差別をなくすことを目指し、積極的に人権・同和教育の推進を図る。町民の人権意識の高揚を推進するため、指導者の育成と人権・社会同和教育推進体制の充実を図る。



教育集会所

学社連携による人権・同和教育の充実推進を図る。

人権・同和教育関係事業

人権学習講座 「共に生きる」 年五回 講話・映画
指定部落研修会 「明るい町づくり映画の集い」 六月～十二月 フィルムフォーラム (六部落)
人権意識の高揚策として、啓発・広報活動 (ポスター・標語の募集、展示、広報くぼたの活用)
各種学習講座における人権学習の実施

歴代公民館運営審議委員

	古賀市次	手塚萬次	吉村又男	永松憲治	江越虎一	池田 滋	昭和四二年四月二五日～昭和四五年三月三日
	中野チヨ	江原とし子	枕島勝男	江越ツヤ子	古賀清吉		
	高原健照	横尾照子					昭和四五年四月 一日～
	力久重雄	福田文治	塚本トヨ	手塚萬次	蘭 正男	古賀清吉	昭和四六年五月 一日～昭和四八年四月三〇日
	向島勝真	楠田てる代	西村達五郎	藤瀬 登	古賀市次	陣内勝裕	
	大久保実	鶴丸時治	陣内 巖				
社会教育	副島虎雄	篠崎 規	西村達五郎	中野欽八	宮永清司	古賀清吉	昭和四八年五月 一日～昭和五〇年四月三〇日

就任 退任

社会教育

山田 実	北村要之	志津田和己	山崎吉幸	高原シツエ	江越福吉	昭和五八年五月一日	昭和六年四月三〇日
大久保実	森永藤男	横尾繁雄	力久義夫	中野吉実	田中嘉文	シ	シ
大島 一	力久重雄					シ	シ
永瀬義明	野上宗一					昭和五九年四月一日	シ
平安寺扶	山田 実	倉本一美	山崎吉幸	高原シツエ	野上宗一	昭和六〇年五月一日	昭和六年四月三〇日
横尾繁雄	西村達五郎	中野吉實	力久富士夫	原田参次	力久重雄	シ	シ
白浜 寿	楠田広次	陣内秀則				シ	シ
玉沢 豊	香月郁夫	江口定條	林 徳二			昭和六一年五月一日	シ
平安寺扶	小柳輝彦	船津丸幸男	香月郁夫	高原シツエ	今泉辰国	昭和六二年五月一日	平成 元年四月三〇日
横尾繁雄	中野吉實	力久富士男	原田参次	力久重雄	江口定條	シ	シ
楠田広次	満岡保徳	高原 明				昭和六三年五月一日	シ
角田次吉						シ	シ
右近門太郎						五月一〇日	シ
田中利治						五月二六日	シ
儀間 厚	陣内寛孝	船津丸幸男	高原義行	高原シツエ	角田次吉	平成 元年五月一日	平成 三年四月三〇日
横尾繁雄	高原 明	右近門太郎	田中利治	力久重雄	江口定條	シ	シ
楠田広次	塚原正幸	江原吉次				シ	シ

大島 一	塚本トヨ	中野 勲	原田美佐子	金田 保	陣内 巖	シ	シ
鶴丸祐夫						シ	シ
早田初義	副島虎雄	金田 保	今泉辰国	横尾繁雄	鶴丸祐夫	昭和五〇年五月一日	昭和五年四月三〇日
大島 一	古賀清吉	渋田新市	副島千代子	高原シツエ	白浜 寿	シ	シ
力久重雄	大久保實	水町清次				シ	シ
中野 和	早田初義	高原シツエ	木村正幸	佐保 誠	中野清人	昭和五二年五月一日	昭和五四年四月三〇日
渋田新市	古賀清吉	鶴丸祐夫	大島 一	横尾繁雄	大久保実	シ	シ
水町清次	力久重雄	堤松次				シ	シ
遠江芳男						昭和五二年七月二五日	シ
福井知男	中野 和	力久重雄	堤 松次	西村達五郎	佐保 誠	昭和五四年五月一日	昭和五六年四月三〇日
水町清次	塚原次郎	大久保實	向嶋作次	横尾繁雄	高原シツエ	シ	シ
大島 一	遠江芳男	田中嘉文				シ	シ
山田 実	中野 和	山崎吉幸	白浜 寿	高原シツエ	鶴丸弘二	昭和五六年五月一日	昭和五八年四月三〇日
横尾繁雄	船津丸一郎	塚原次郎	大久保實	大島 一	中野吉實	シ	シ
田中嘉文	力久重雄	堤 松次				昭和五七年四月一日	シ
北村要之	蘭 弘	西原幸一				五月一日	シ
香月政利						シ	シ

原田参次	高園五郎	弥永峯雄	夏秋道博	高原シヅエ	古賀友芳	平成元年二月一日〜平成三年四月三〇日
金田 卓	蘭 俊二	大坪俊輔	田中利治	力久重雄	村田英昭	平成二年五月一日〜
村田英昭	塚原正幸	高岸範雄	高原シヅエ	古賀信幸	原田参次	〃 七月一日〜
高岸範雄	夏秋博隆	夏秋道博	高岸範雄	原田栄治		〃 八月一日〜
儀間 厚	森永良彦	大坪俊輔	田中利治	高岸範雄		〃
原田参次	瀬口昭彦	中野清人	森田義春	高田智貴		〃
木村正幸	吉末誠介	西岡正博	夏秋道博	高原シヅエ	南里津代次	平成五年五月一日〜平成七年四月三〇日
高園五郎	原田一郎	中尾清治	田中利治	古賀一幸	古賀友司	〃
蘭 俊二	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
江口保則	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
吉末誠介	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
瀬口昭彦	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
原田参次	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
中野拓弥	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
志波清春	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
原 晃道	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
田中一利	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
西 保博	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
蘭 和子	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
林田昭英	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃
石井清美	高岸範雄	田中利治	古賀一幸	古賀友司		〃

古賀淳一	田中一利	西岡秀男	中野清人	蘭 和子	木村光義	平成九年五月一日〜平成二二年四月三〇日
中野拓弥	原 晃道	原田一郎	中尾清治	田中利治	阿南宗博	〃
石丸賢之	志波清春	原田一郎	中尾清治	田中利治	阿南宗博	〃
井上武夫	堤 俊博	原田一郎	中尾清治	田中利治	阿南宗博	〃
古賀淳一	井上武夫	西岡秀男	中野清人	蘭 和子	成清虎男	平成二〇年四月一日〜
夏秋保治	中尾清治	木村正幸	阿南宗博	小川伊佐緒	志波清春	平成二一年五月一日〜平成二三年四月三〇日
池田 巽	中野茂康	阿南宗博	小川伊佐緒	志波清春		〃
江頭敏男	向嶋作次	西岡正博				平成二二年五月一日〜

学校週五日制推進委員会

平成十四年四月より実施される、学校週五日制に備え、平成四年七月一日に学校週五日制推進委員会が設置され、円滑な学校現場の移行を図るため、議会・学校・教委・公民館・PTA等の代表一三名の委員により、研究討議が進められた。内容は月に二回、第二土曜と第四土曜を休日とした場合の、学校・地域・家庭の対応についてであった。

同年九月一日、小学校と中学校に、学校週五日制に対する指導員を委嘱した。

平成六年六月三十日、推進委員会は解散したが、実験的に施行された週五日制は、児童・生徒、学校の対応には大した動揺もなく移行されてきたが、スポーツクラブ等に所属する児童・生徒、親の負担増が心配される。

児童・生徒の豊かな心身の発達を願い、家庭や社会のなかの一人としての役割を学ぶ意義有る一日となることが期待される。

推進委員

向嶋與四郎 原田 参次 古賀 清吉 中野 和 堤 松次 儀間 厚 高園 五郎
 稲富 浩 中村 智明 弥永 峯雄 夏秋 道博 下平 裕之 阿南 宗博
 指導員 小学校 儀間 厚 中学校 高園 五郎

久保田町体育指導委員

スポーツ振興法に基づき、昭和四十九年三月三十日教委規則第一号により、体育指導委員の職務が明示されている。
 住民の求めに応じてスポーツの実技の指導を行なうこと。
 住民のスポーツ活動の促進のための組織の育成を図ること。
 学校、公民館などの教育機関その他行政機関の行なうスポーツの行事または事業に関し、求めに応じ協力すること。
 スポーツ団体その他の団体の行なうスポーツに関する行事または事業に関し、求めに応じ協力すること。
 住民一般に対しスポーツについての理解を深めること。
 この他、住民のスポーツ振興のための指導助言を行なうこと。

〔歴代体育指導委員〕

金田 保 永松 憲治 古賀 正人 江越 正幸 志津田和己 昭和四十九・九・一

夏秋 道博 西岡 正博 古賀 幾太 中野 茂康 力久 光之 中尾 亨

陣内 寛孝 小副川万次郎 永瀬 義明 古賀 研二

古賀 正人 原田 藤吾 志津田和己 夏秋 道博 昭和五十四・三・一 昭和五十六・二・二十八

中野 茂康 陣内 寛孝 古賀 友芳 陣内 寛孝 夕 五十六・三・一 夕 五十八・二・二十八

古賀 正人 原田 藤吾 古賀 友芳 陣内 寛孝 夕 五十六・三・一 夕 五十八・二・二十八

志津田和己 夏秋 道博 中野 茂康 香川 治義 夕 五十九・四・一

古賀 正人 陣内 寛孝 根本 行 香川 治義 夕 五十九・四・一

夏秋 道博 小野 憲明 中野 茂康 根本 行 夕 六十一・四・一 夕 六十三・三・三十一

古賀 正人 古賀 信幸 古賀 友芳 根本 行 夕 六十一・四・一 夕 六十三・三・三十一

香川 治義 小野 憲明 夏秋 道博 根本 行 夕 六十三・四・一 夕 平成 二・三・三十一

古賀 正人 古賀 信幸 古賀 友芳 根本 行 夕 六十三・四・一 夕 平成 二・三・三十一

香川 治義 小野 憲明 夏秋 道博 根本 行 夕 六十三・四・一 夕 平成 二・三・三十一

永瀬 義明 吉末富美子 香川 治義 香川 治義 平成 元・四・一 夕 二・四・一 夕 四・三・三十一

古賀 正人 古賀 信幸 古賀 友芳 香川 治義 夕 二・四・一 夕 四・三・三十一

永瀬 義明 吉末富美子 副島 嘉子 夏秋 道博 夕 二・四・一 夕 四・三・三十一

根本 行 吉末富美子 副島 嘉子 夏秋 道博 夕 二・四・一 夕 四・三・三十一

社会教育

永瀬 義明 根本 行 香川 治義 吉末富美子 夕 四・四・一 夕 六・三・三十一

夏秋 道博 副島 嘉子 古賀 久貴 金田 卓

中野 清人 古賀日出男 古賀 正孝

永瀬 義明 香川 治義 夏秋 道博 吉末富美子

副島 嘉子 古賀 久貴 金田 卓 中野 清人 平成 六・四・一 ～平成 八・三・三十一

古賀 正孝 古賀日出男 原田 敏行

永瀬 義明 香川 治義 夏秋 道博 吉末富美子

副島 嘉子 古賀 久貴 金田 卓 古賀日出男

原田 敏行 光岡 清隆 大川内千萬子 平成 八・四・一 ～ 十・三・三十一

野口ミドリ 香川 治義 副島 嘉子 古賀 久貴

香川 治義 夏秋 道博 副島 嘉子 古賀 久貴 平成 九・五・一 ～ 十・三・三十一

金田 卓 古賀日出男 原田 敏行 大川内千萬子 平成 十・四・一 ～ 十二・三・三十一

光岡 清隆 古賀 信也 野口ミドリ 原田 敏行 大川内千萬子

香川 治義 夏秋 道博 古賀 久貴 原田 敏行 平成 十二・四・一 ～ 十四・三・三十一

副島 嘉子 古賀 久貴 金田 卓 古賀日出男

原田 敏行 光岡 清隆 大川内千萬子

野口ミドリ 香川 治義 副島 嘉子 古賀 久貴

香川 治義 夏秋 道博 古賀 久貴 原田 敏行



佐賀郡体育大会柔道



町体育大会

大川内千萬子 副島 嘉子 古賀 信也 古賀日出男
光岡 清隆 野口ミドリ 吉嗣 孔一 志波つや子

3 社会教育関係団体

P T A

昭和二十二年三月七日、文部省は父母と教師が子供の真の幸福を願ひ、協力して学習し実践する「父母と先生の会」の設立を指示した。翌二十三年六月には早くも第一回全国協議会が開かれた。同十二月文部省は父母と先生の会の参考規約を各都道府県に配布してP T Aの結成を促した。これは当時、子どもを中心として精神的環境整備をはかるアメリカ式教育の導入であったが、日本の父兄会と相通じるところがあつて、いち早く結成された。

P T A発足当初は、小・中学校併設の関係から、町村単位のP T Aとなり、小・中学校P T A組織が合同または一本化されて結成された。

二十九年の県財政の窮乏から人員整理が表面に出てくると、県P T Aは一斉に立つて教員整理に反対した。三十一年県財政再建に伴う教員削減問題では、反対と善処かたの要望陳情が、知事、県議会に対して行なわれた。そして教育を守る県民大会を開いて、計画案の修正を要望した。

三十二年二月、全国的に有名になった佐賀県教組の休暇闘争には、絶対反対を叫び、あくまでも話し合ひで解

本会は、児童の幸福増進のため、父母と教師とが互いに教育の責任を分担しつつ相協力して、学校の教育計画並びに活動が、完全に実施できるような態勢を、地域社会の中に作っていくことを以て目的とする。

〔事業〕

- 一 学校と家庭の緊密化を図り、地域社会における教育の整備進歩について、協議するとともに社会の世論を喚起する。
- 二 児童のために良好なる教育的環境を作ること努力する。
- 三 会員の教養水準を高め親睦を図る。
- 四 その他、本会の目的を達成するために必要な事業を行なう。

〔専門部会〕

生活指導部会

小中補導委員により、地区全体での巡回指導に努める。児童の安全と非行防止に努める。通学路の安全整備に努め遊び場の設定等、校外における安全教育の万全に努める。

給食部会

学校給食への理解促進に努める。(親子給食) 各家庭での栄養改善の普及に努める。親子料理教室を企画運営する。

環境整備部会

校内の環境整備に努める。

文化部会

知性と創造力に富み、感性豊かな児童の育成に努める。会員の教養を高めると同時に会員相互の親睦を図る。

広報部会

P T A会報を発行し、P T A活動の推進に関する情報の伝達に努める。講習会に参加し、会員

の資質の向上に努める。

保健体育部会

会員相互の親睦と子どもの健康及び体力の増進を図る。

学年部会

学級・学年活動の企画運営をする。

母親部会

母親の教養を高めるための研修会への参加。ベルマーク収集。

父親部会

父親の教養を高めるための研修会への参加。各部会への協力。

活動情況

P T A総会、例年六回、会計監査、新旧常任委員会、常任委員会年七回、各種専門部会、P T A歓送迎会、学年対抗親睦ミニバレーボール大会(職員・役員)、新聞「しせい」発行年三回、生活補導委員会・巡回補導年三回、給食指導委員会年二回、研修視察旅行、親子バレーボール大会、親子除草作業、交通安全街頭指導、大運動会、文化フェスティバル、親子給食、愛校セーリング、母親研究会、県母親バレー大会、県P指導者研修会、九州P T A大会

〔平成十三年度常任委員〕

会長	満岡 保徳	保健体育部長	田中三保子	顧問給食	末次 仁士
副会長	西岡 豊	文化部長	鶴丸 良子	文化	増岡 恵子
〃	七田 浩康	母親部長	原田 法子	母親	釘本 文恵
〃	江頭 景子	父親部長	塚原 勝則	〃 学年	滝川 節子
〃	中野千恵子	給食部長	古賀 千景	〃 広報	田中 直子
一学年代表	西村美佐子	生活指導部長	中野美智子	〃 生活指導	井原 竹始

二学年代表	土井 邦子	学校代表	江頭 敏男	顧問父親	永瀬 一裕
三々	一ノ瀬由美	監事	蘭 高幸		
四々	山田 真弓	夕	鶴丸 弘二		
五々	林 真奈美	庶務(学校)	滝川 節子		
六々	中島 静子	会計(夕)	田中三恵子		
環境整備部長	原竹 綾子	顧問環境整備	伊東 一義		
広報部長	古川 洋子	夕 保健体育	糸山 智子		

思斉中学校PTA

〔目的〕

本会は、家庭と学校の連絡を密にし、保護者と教職員が協力して思斉中学校生徒に対するより良い教育を目指すとともに、会員相互の親睦を図り、教養を高めることを目的とする。

〔事業〕

- 一 家庭、学校及び地域社会における教育の推進・発展に関すること。
- 二 教育環境をより良くするための研究、協議。
- 三 講演会、研究会の開催。
- 四 会員相互の研鑽、情報交換。



ふれあい料理教室

- 五 行政組織、社会教育団体等各種関係機関、団体、組織との連絡、協議。
- 六 その他、本会の目的を達成するために必要な事業。

〔委員の任務〕

委員は、委員会でそれぞれの任務を協議し遂行する。
 補導委員は、生徒周辺の教育環境に配慮しながら、生徒の指導にあたる。
 交通安全委員は、交通安全の指導にあたる。
 父親委員は、夜間巡回指導等にあたる。
 母親委員は、会員の意見を広くもとめ、相互の親睦を図る。
 教養委員は、会員相互の親睦、研修等を行い、会報を発行する。

〔活動情況〕

PTA定期総会、新旧役員会、常任委員会二回、学年PTA学年活動五回、交通安全指導三回、PTA新聞企画会議一回、PTA新聞発行三回、広報セミナー、部活動振興会総会、交通安全全部会三回、補導委員会四回、PTA研修視察(小中合同)、父親母親部合同委員会、父親部河川清掃・反省会、授業参観二回、校内文化祭、ピ
 ン回収、町内巡回指導三回、体育大会、愛校セール、思斉教育振興会、(講演会)、卒業証書授与式、家庭訪問、
 郡PTA会長会六回、郡P連合会総会、郡P母親部会総会、郡P父親ミニバレーボール大会、郡P母親ミニバレー
 ーボール大会、郡PTA研究大会、郡P母親研修会、郡P会長・母親委員・校長合同研修会、郡PTA連合会定
 期総会、県PTA指導者研修会、県P母親ミニバレーボール大会、県PTA研究大会、県P母親部研修会、P



廃品回収(思斉中親子)

A九州大会

〔平成十三年度思斉中学校PTA役員〕

会長	西岡 正博	横江	三年部長	岩永 和男	上恒安
副会長	横尾 祐生	町西	〃 副部長	田中 曜子	新田
〃	立野 弘幸	快万	二年部長	古川 芳見	江戸
〃	塚原 勝子	横江	〃 副部長	江越富士子	久富東
補導部長	千綿 朝子	下満	一年部長	御厨 俊一	福富
補導副部長	中尾真佐子	久富	〃 副部長	中島 美幸	永里
交通安全部長	森 孝子	中副	父親部長	横尾 祐生	町西
〃 副部長	水田美奈子	江戸	〃 副部長	西原 幸一	大立野東
教養部長	古賀 俊子	堀西	母親部長	西川摩弥子	小路
教養副部長	千綿 菊代	下満	〃 副部長	塚原 文子	久富西
幹事	林 徳茂	新田			
〃	原田 泰行	快万			
監事	野口 正昭	金丸			
〃	蘭 好子	草木田			

婦人会

戦後における社会教育の大きな柱に「婦人の地位の向上」があった。

昭和二十年十二月に、国会で選挙法の改正が行なわれ、婦人の参政権が実現した。

この婦人参政権を記念し、婦人の地位向上のための運動が、全国的に広がり、二十四年四月十日から一週間、

第一回の婦人週間が設けられた。この婦人週間の目標は、

婦人の解放に関する正しい理解

婦人の地位向上を妨げている種々の原因の明確化

婦人の地位向上に役立つ既存施設の周知徹底

であった。また「もっと高めましょう」のスローガンのもとに「私たちの力を」「私たちの地位を」「私たちの自覚を」を合い言葉に、婦人の集会やその他の活動が開催された。

以後婦人週間は、毎年力強く推進され、婦人の地位の向上と活躍は目覚ましいものがあった。

婦人団体の組織については、戦前の愛国婦人会、国防婦人会が解散し、新たな組織や親睦グループが誕生した。

社会教育

婦人会は、昭和二十二年十月二十四日、佐賀県連合婦人会として組織され、戦後のインフレのなかで、結婚改善に次ぐ物価問題と取り組み、この運動は同二十五年七月に、生活協同組合設立となった。同二十七年三月、県連合婦人会は「婦人連絡会」と改称、各市郡もこれにならった。

昭和二十六年頃から県婦人会館建設の気運と、その財源造成に会員一日一円貯金の構想が生まれ、この運動を

三十年四月まで続け、同年十月、待望の会館を佐賀市神野町に完工させた。敷地一、四八五平方尺 建坪六六一、六五平方尺 総工事費二〇〇万円、全国に名をあげた。

平成十年七月、近代的様相も新たに、新婦人会館が完工した。

久保田町地域婦人連絡会

〔歴代婦人会長〕

- 初代 村田 満子 昭和二十二年 昭和二十六年三月三十一日
- 二代 堤 富代 夕 二十六年四月一日〜夕 四十一年二月 十六日
- 三代 中島 綾子 夕 四十一年四月一日〜夕 四十二年三月三十一日
- 四代 中野 チヨ 夕 四十二年四月一日〜夕 四十六年三月三十一日
- 五代 塚本 トヨ 夕 四十六年四月一日〜夕 五十年三月三十一日
- 六代 高原シツエ 夕 五十年四月一日〜平成 八年三月三十一日
- 七代 蘭 和子 平成 八年四月一日〜 現在

〔目的〕

各支部との連絡を密にし、その進展を助ける。
 婦人の教養を高め相互の親睦をはかる。
 消費者の意識を高め家庭生活の合理化をはかる。
 社会環境の浄化をはかり、青少年の健全育成につとめる。



婦人会総会

他機関、他団体との連絡調整をはかり、その活動に協力する。

〔活動情況〕

支部長会 一二回、総会 一回、郡婦人会総会、県婦連大会参加、
 婦人学級 一一回 支部長研修会 一回、同和問題研修会 一回、ワープロ教室 四回、
 行事参加 春秋香椎神社お祭り、花祭り、消防夏季訓練・出初式、町敬老会、ガン撲滅大会、町民体育大会、
 町文化祭、町保健福祉大会、町成人式、町生涯学習フェスティバルイン久保田
 協力事業 赤十字奉仕団、更生保護婦人会、県社会福祉協議会、交通安全母の会、対ガン協会、国連協会、結
 核予防会、婦人問題研究会、全地婦連、北方領土返還要求運動

〔平成十三年度婦人会役員〕

- | | | | | | |
|-----|-------|-----|----|-------|-----|
| 会長 | 蘭 和子 | 中副 | 役員 | 土橋 松代 | 下満 |
| 副会長 | 千々岩栄子 | 北田 | 夕 | 野口ミドリ | 金丸 |
| 会計 | 徳永 壽子 | 宿 | 夕 | 今泉 洋子 | 上恒安 |
| 役員 | 太田美津子 | 久富西 | 監査 | 鶴丸みどり | 町東 |
| 夕 | 伊田みつ子 | 北田 | 夕 | 井上せきよ | 快万 |

〔理事〕

- | | | | | | |
|----|-------|------|-------|------|-------|
| 町東 | 森永てる子 | 大立野東 | 塚原 泰子 | 下新ヶ江 | 森 キヨ子 |
| 町西 | 今泉 恵子 | 福富 | 古賀 節子 | 福島 | 原田 雪枝 |

社会教育



国立阿蘇青年の家研修会

徳久	池田千架子	久富東	江口なをみ	上新カ江	大坪	博子
快万	高原万枝	久富西	中野テル子	福所	森	晴子
徳間	小柳清子	搦東	中嶋美智子	上恒安	千布まり子	
小路	谷昭子	搦西	土橋キサエ	久保田宿	徳永	壽子
草木田	志波幸子	江戸	津江友子	下満	横田佐知子	
中副	高田清子	横江	倉本幸子	北田	古賀	恭子
麦新ヶ江	藤瀬百合子	金丸	井口登喜子			
大立野北	香川恵子	永里	森紀美子			

思齊生活会議

戦後、社会情勢の混乱、経済の貧困の中から、自らの生活を創意工夫しようとする、心ある人々によって新生活運動が始まった。昭和三十年（一九五五）鳩山内閣の時、財団法人新生活運動協会が発足し、各都道府県でも新生活運動協議会を結成、市町村の教育行政、公民館、地域社会教育団体に事業を委託した。

各市町村では任意に、冠婚葬祭の簡素化や結婚改善に取り組んできた。昭和五十八年佐賀県新生活運動連絡協議会は、県内一五市町村に「村・町づくり運動」を発足させ、農山漁村における村おこしや生活環境の浄化を推進した。



婦人会研修（吉野ヶ里）

その後、新生活運動協会の重点目標が、生活会議・生活学校活動に絞られ、学び、話し合い、実践する活動が展開されてきた。

昭和五十七年、新生活運動協会が、「財団法人あしたの日本を創る協会」と発展的に改称し、今後の運動がものから心への転換が図られ、少子・高齢化時代の明るい町づくりが推進されることになった。

久保田町では、公民館、町婦人会が中心になり、早くより冠婚葬祭の改善や生活環境の浄化等に取り組み、今日に至るまで、その他の心ある会員により、EM菌による生ごみ処理用のボカシ作り、廃油からの石けん作り、駅の清掃奉仕等学習活動が続けられている。

歴代会長

初代 森 ヨシ子 昭和五十一年四月～昭和五十五年三月
 二代 中野 澄子 〃五十五年〃〃〃五十五年十一月死亡
 三代 中野美佐子 〃六十年〃〃〃六十四年〃
 四代 永瀬 安子 平成元年〃〃平成五年〃
 五代 森 ヨシ子 〃五年〃〃〃 現在

久保田町体育協会

〔体育協会の創設〕

昭和二十六年十二月一日付、久保田新聞に「体育協会会員募集」の記事がある。以前設立されていた体育協会が、いつの間にか立ち消えになっているので、村の体育協会を再建しようというのが記載してある。このことが



ボカシ作り思齊生活会議

ら創設の時期は定かではないが、ほぼ推測できる。町公民館を中心に、公民分館長や駐在員の方々の協力が再建の力になっている。

昭和二十八年七月十九日、体育協会再建総会を開催、役員を次の通り決定した。

役員	
会長	村田 隆長
副会長	古賀 光王
陸上部長	永瀬 義明
〓 副部長	村田 英昭
〓 〓	室中百合恵
野球部長	上町 二男
〓 副部長	梶原治太郎
〓 〓	力久 昭夫
柔道部長	満岡 久男
柔道副部長	白浜 鉄次
〓 〓	木村 正幸
卓球部長	力久 重雄
〓 副部長	古賀 信幸
〓 〓	田中スミエ



歩け歩け大会

会則の第二条(目的)
 本会は、村民の体位の向上を計ると共に、会員相互の心身の鍛練、品位の向上及び親睦を計り、本村発展に資することを目的とする。

設置部

陸上・野球・卓球・排球・水泳・相撲・柔道・しない競技 その他必要な部。

事業

村民体育大会の開催、各部の競技大会、村外各種競技大会への参加、各部に関する指導講習会の開催。

歴代会長

初代	村田 隆長	昭和二十八年～三十一年	七代	金田 保	昭和五十二年～昭和五十六年
二代	中島 松治	〓 三十二年～三十六年	八代	嶋田 健橘	〓 五十七年
三代	陣内 熊雄	昭和三十七年～四十三年	九代	森 賢一	昭和五十八年～平成 六年
四代	古賀 二男	〓 四十四年～四十八年	一〇代	川副 綾男	平成 七年～〓 十一年
五代	金田 保	〓 四十九年	十一代	古賀 友芳	〓 十二年～
六代	永松 憲治	〓 五十年～五十一年			現在

(体育協会の現状)

従来、行政依存型の組織・運営・指導が実施されてきたが、町民・会員の自主的活動を期待する方向が示され、平成十二年四月一日より新しい役員組織によって自主的な運営が始まった。

目的

本会は、久保田町の体育・スポーツ団体を統括し、あわせてこれを代表する団体として、町民の健康・体力の維持増進とともに心身の健全な発達を図る体育・スポーツの普及と振興に関する事業を行い、もって町民相互の親睦を図り住みよい郷土づくりに資することを目的とする。

各種スポーツ大会・教室の開催、スポーツクラブ及び指導者の育成、各種スポーツ大会への選手の派遣、スポーツに関する講習会、研修会の開催。その他、本会の目的達成に必要な事業。

役員

会長	古賀 友芳	久保田宿	理事	西岡 正博	横 江
副会長	古賀 久貴	中 副	理事	香川 治義	大立野東
顧問	原田 禎浩	シ	副	原田 博文	中 副
監事	志波 清春	麦新カ江	シ	福田 博昭	下新ヶ江
シ	金田 卓	久富 東	シ	高原 寿文	堀 西
理事長	下平 裕之	町 西	シ	古賀 義治	町 東
副理事長	船津丸幸男	上新カ江	シ	原田 守久	大立野東
理事	古賀 健太	久富 西	事務局	木下湯乃佳	草木田



町体育大会表彰

野球部	原田 博文	中 副	ボーリング同好会	田島長太郎	北 田
卓球部	大坪 三郎	草木田	ミニテニス	原田 泰行	快 万
相撲部	志津田和己	上 恒安	万寿会	徳永 寿子	久保田宿
バレーボール協会	香川 治義	大立野北	テニス連盟	前田 泰志	シ
ゲートボール協会	高森 重行	小 路	エアロビクス部	鶴丸 京子	町 東

柔道部	中島 速人	副 所	ゴルフ部	福田 博昭	下新ヶ江
陸上部	高原 寿文	堀 西	バドミントン部	梶山 重敏	久保田宿
剣道部	下平 裕之	町 西			
ソフトボール部	力久 俊之	快 万			
グラウンドゴルフ協会	古賀 友芳	久保田宿			

体育協会支部長

町 東	古賀 義治	中 副	徳永 仁己	久富西	船津丸隆義	下新ヶ江	中野 治
町 西	新郷 正隆	麦新ヶ江	横尾 敏郎	堀 東	南川 康信	福 島	松枝 英樹
徳 間	岸川 貴行	新 田	香月 将博	堀 西	原田 和浩	上新ヶ江	古賀 正樹
徳 久	小柳 春樹	大立野北	白浜 讓太	江 戸	江口 昭二	福 所	高津 慎二
快 万	雪竹 直文	大立野東	原田 守久	横 江	石橋 周二	上恒安	江口 達也
小路	水町 尊光	福 富	蘭 和彦	金 丸	大古場和孝	久保田宿	西村 剛
草木田	寺崎 和正	久富東	江越文一郎	永 里	横尾 隆行	下 満	千綿 敏樹
北 田	今泉 善文	桜 木	森田 宜親				

久保田町青年団

社会教育
 地域青年団は、江戸時代の若者制度を受け継ぐものといわれ、青年たちの相互教育、集団としての娯楽の享受、社会に対する貢献を結合の思想としている。戦後間もない一九四六年（昭和二十一年）はじめ頃から青年団再興の



青年団スキー教室



青年団と子どものひな祭

組織

団 長	中島 常德	横 江	団 員	中溝 孝広	中 副	団 員	古賀 慎司	上恒安
副団長	夏秋 俊男	新 田	ク	横尾 利法	大立野東	ク	南川 一美	搦 東
組織部長	原田雄一郎	福 島	ク	福田 健一	下新ヶ江	ク	樺島 力	小路
事業ク	小川伊佐緒	北 田	ク	横尾 泰介	上新ヶ江			
監 事	蘭 憲佳	福 富	団 員	蘭 慎二	中 副			
会 計	古賀 正則	牛 津	ク	松下 正隆	上新ヶ江			

動きが始まり、同年十月、九郡一六五町村の青年団を集結した佐賀県連合青年団が発足した。

久保田町でも、時を同じくして戦後日本の復興に燃えた青年たちが立ち上がり、昭和二十一年四月一日、思斉小学校講堂に溢れる程に集結し、青年団結成総会が開催され、初代団長に蘭 弘が就任した。その後、世相の変遷のなかで、青年団活動にも陰りが見え、組織の弱体化が心配される様になったが、現在も各方面に活躍を続けている。

〔現状〕

目的

団員を健全な公民としてその資質を向上せしめ団員の親睦を図り、郷土愛を培養し町の発展に寄与することを目的とする。

事業

産業の振興発展・文化社会体育の発展・団員相互の連絡協調・各種機関団体との連絡提携・その他目的達成に必要な事項

活動情況

きて・みて・遊ぼう久保田町、夏休みマンガ祭り（映写会）、高校生との交流会（焼肉大会）、県青年祭、ボウリング大会、町民体育祭、団員親睦会、成人式参加、スキー教室、ひな祭りパーティー、総会一回、役員会四回、監査会一回



青年・高校生との焼肉交流

常任理事 古賀 鉄也 監事 古賀 信也
 〃 鶴丸 和則 〃 久田 妙子
 〃 山田 清

目的 本会は、各子どもクラブ及び育成会相互の連絡提携と研修を図り、その充実振興に寄与することを目的とする。

- 事業
- 一 子どもクラブ活動充実振興のための事業
 - 二 子どもクラブ指導者養成のための事業
 - 三 子どもクラブ指導者相互の連絡協調
 - 四 各種団体機関との連絡提携
 - 五 その他目的達成に必要な事項

〔構成〕

本会は単位子どもクラブの育成会をもつて構成する。

〔行事〕

- 総会、役員会、育成会長会、監査会、親子スケッチ会
- 役員、育成会長合同研修会、席書会
- キャンプ会、ふれあい教室



席書会

球技大会(郡・県大会)

〔平成十三年度育成会長〕

町東	古川くにえ	中副	北村 友子	久富西	井手 明生	下新カ江	中野 治	北田	久田 妙子
町西	江島富紀子	麦新ヶ	江横尾 守	羽東	原田 弥生	福島	谷口 梅男	桜木	石田由美子
徳間	石丸 哲郎	新田	北古賀 正	羽西	古賀 鉄也	上新ヶ	江浜下 大吾		
徳久	武藤 直樹	大立野	北木下 澄男	江戸	古賀 信也	福所	古賀 真澄		
快万	陣内 林	大立野	東今泉 恭子	横江	森山 芳子	上恒安	吉岡 靖博		
小路	大久保るみ	福富	塚本 陽輔	金丸	岡田千津子	久保田	宿中島 修身		
草木田	原口千登世	久富東	中尾 正道	永里	鶴丸 和則	下満	山田 清		

子どもクラブジュニアリーダー研修会

久保田町高校生保護者連絡会

〔設立の趣旨〕

昭和五十三年頃の荒れる中学校の状態に心を痛めた親達が、中学校を卒業したあと子どもクラブから離れる高
 校生の健全育成には、地域で高校生の親達が連帯する組織が必要という、共通認識を持った保護者有志が、高校
 生の保護者と呼びかけ、昭和五十四年九月二十三日設立総会が開催され、初代会長に満岡郁夫が就任した。

〔歴代会長〕

初代 満岡 郁夫 昭和五十四年〜昭和五十六年 二代 香月 政利 昭和五十七年〜昭和五十八年

社会教育

部落名	理事	生徒役員(数字は学年)
町東	前山 栄	前山奈津希 一 柿永 麻美 二
町西	夏秋 保治	木村 陽介 三 夏秋あづさ 三
徳間	山田 満鶴	山田あゆみ 一 遠田 法子 二
快万	荒木 拓一	荒木 崇好 一 原田美沙子 三
小路	谷口 吉力	中島 真里 二 仏坂 有紀 二
草木田	蘭 秀則	坂井 仁美 二 志波 千晶 二
中副	夏秋 博隆	藤木 永一 二 夏秋 和佳 三
麦新カ江	中原 陽子	副島 弘子 一 横尾 里美 二
新田	堤 一弘	江越 忠隆 三 堤 信也 三
大立野北	古賀 一隆	松尾 祥平 一 古賀 方也 二
福 富	古賀 和善	蘭 瑠美 二 古賀恵理子 二
久富東	江越 義高	塚原 篤史 二 中島圭二郎 二
久富西	馬渡まち子	蒲原 健 三 馬渡 洋輔 三
搦 東	石井 直子	石井あゆみ 二 下岡 忠司 二



高校生バンド

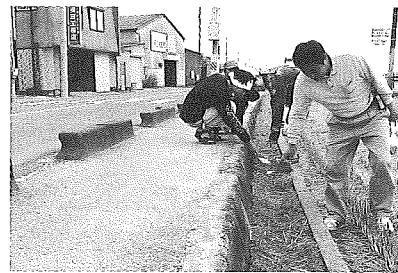
顧問 村上 達美 下 満

理事・生徒役員

長期休業中の生活指導。研修会・講演会等の開催。レクリエーション大会等の開催。情報交換、その他目的達成に必要な事業を行う。

平成十三年度本部役員

会長	大野 幸治	福島	監事	林 徳茂	新田
副会長	南川 照雄	搦 東	志波 一巳	草木田	
シ	横尾 淳子	麦新カ江	常任理事	岡島 浩	下新カ江
シ	立野 弘幸	快万	高森 昭年	小路	
シ	田中 幸子	新田	小松 博子	快万	
庶務	城野 優子	草木田	原田智津子	中副	
会計	林田 幸子	小路	藤木 良江	中副	



親子缶拾い

- 三代 香川 治義 昭和五十九年〜昭和六十三年 四代 香月 郁夫 平成 元年〜平成 二年
- 五代 陣内 敏實 平成 三年〜平成 四年 六代 志津田和己 シ 五年〜シ 七年
- 七代 小柳 博行 シ 八年〜シ 十年 八代 大野 幸治 シ 十一年〜 現在

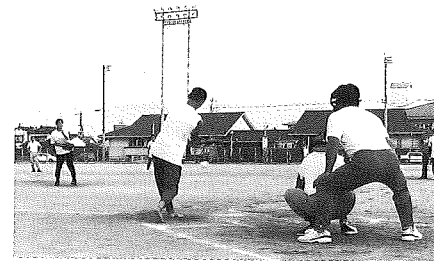
〔現状〕

目的

本会は、高校生自らの努力による社会参加を促し、高校生の生活指導と保護者の連携を図ることを目的とする。

事業

堀西	古賀 義則	高原 光平	二	土橋ゆかり	二
江戸	西岡憲一郎	塚原 祐輔	二	西岡 幸紀	二
横江	倉本 富行	高柳 良太	二	倉本 雄司	二
金丸	小倉 孝信	一ノ瀬祐介	一	小倉 匡司	二
永里	大島 辰巳	釘本 淳郎	二	森 惇	二
下新カ江	原田 孝行	古賀 文一	一	原田 茂樹	二
福所	森 貢	桑原 和之	二	森 一郎	一
上恒安	千布まり子	南里 麻衣	二	千布 一高	三
久保田宿	鐘ヶ江輝昭	土橋 泰広	二	中野 寛子	二
下満	山崎 幸雄	永田 健二	二	稲股 美歌	二
北田	平野 弘雄	平野 里美	一	田島 亜弥	二
桜木	深川いさ子	森田健太郎	一	林田 祐司	二



高校生ソフトボール大会

思斉小スポーツクラブ振興会

この会は、思斉小学校に通う子供達の心身の健全な発達を願う親が集い、スポーツクラブを昭和五十八年に組織し、初期の目的を目指し年々その成果を挙げてきた。

〔活動基本方針〕

思斉小スポーツクラブ活動は社会教育の一環として、地域社会と保護者の委託を受け、健全で規則正しく行わなければならない。

クラブ活動は、子供の心身の発達段階に応じた適切な指導計画に基づいて運営され子供の主体性を育むものでなければならない。

クラブ活動が、子供の教育という理念を達成するために、日常生活全体を見通し学校その他の機関と密接に連絡を取り合わなければならない。

役員 氏名 種目

会長	蘭 剛	バレーボール	評議員	白男川詔子	卓球	評議員	末次 仁士	思斉小体育主任
副会長	立野 弘幸	野球	評議員	原田 藤吾	剣道	会計	永山 忠良	
評議員	宮司 和昭	卓球	評議員	松尾 茂生	野球	顧問	関 曉夫	教育長
評議員	永山 忠良	剣道	評議員	糸山 智子	バスケットボール	顧問	関 曉夫	教育長
評議員	塚原 勝義	バスケットボール	評議員	副島 広記	バレーボール	顧問	関 曉夫	教育長
評議員	井口 英憲	陸上	評議員	荒木 正次	陸上	顧問	関 曉夫	教育長
評議員	陣内 豊柔	道	評議員	古賀日出男	柔道	顧問	関 曉夫	教育長

〔活動内容〕

児童の練習日 週四日以内、各種対外試合への出場、クラブ対抗駅伝大会、初詣マラソン、カヌー体験事業、合同研修会、指導者研修会、各部会

歴代会長

- 初代 井手 康隆 昭和五八年・五九年（二年）
- 二代 白浜 修 〳六〇年
- 三代 大久保 強 〳六一年
- 四代 大坪 直 〳六二年
- 五代 田中 好民 平成二年
- 六代 枕島 博史 〳三年
- 七代 弥永 峯雄 〳四年
- 八代 夏秋 博隆 〳五年
- 九代 中野 清人 〳六年
- 十代 西岡 正博 〳七年・八年（二年）
- 十一代 西岡 秀男 〳九年〳一一年（三年）
- 十二代 向嶋 作次 〳一二年
- 十三代 蘭 剛 〳一三年

久保田町の文化活動

概説

悠久の昔より流れ続ける嘉瀬川の水は、古代文化発祥の源ともいえる有明海に注がれている。久保田町はこの自然の営みにより、形成され育まれてきたと思われる。この自然のなかに人々の暮らしがあり、生活の知恵が文化を生み出してきた。平坦で何の変てつも無い土地であるが、肥沃で水に恵まれ「八筋濠」という水路の築造により稲作文化が益々発達し、生産活動も一段と盛んになったであろう。また、二つの宿場町に育った女達は、三味線などの稽古が当時の教養・生活の糧でもあった。文化は人々の生活の中で生きる為に創意工夫されてきた。

1 久保田町文化協会の発足

久保田町文化協会は、町内の文化団体及び文化活動を続ける個人との相互連絡と親睦融和を図るとともに、文化関係諸機関・団体との連絡を密にし、久保田町の文化振興に寄与することを目的として、平成二年九月三十日、二七サークルの会員が久保田町農村環境改善センターに於いて、協会発足総会を開催した。当日は、久保田町長を始め町内来賓多数出席の下で、当町出身で佐賀県文化団体連絡協議会長大塚殿氏の記念講演「わたしの文化活動」を聴く。初代会長に中野和（町公民館長）を選任した。

文化協会の歩み

- 平成二年九月三十日 文化協会設立総会、規約審議、役員承認、予算審議、佐賀県文化団体協議会加盟の件
- 町文化祭出演、史跡探訪、大塚 殿講演会
- 平成三年 藤間流美都会発表会後援、町夏祭り後援、町社会教育研究大会後援、葉隠の里史跡探訪、こども劇



女子ジュニアバレー



クラブ対抗駅伝大会

場共催、短歌教室（福井満広）、江戸家猫八文化講演会、佐賀大学管弦楽団演奏会

平成四年 講演会「佐賀文化よもやま話」福岡 博、文化講演会「ぼくの細道」気象評論家福井敏雄、末慮国史跡探訪、俳句教室（古賀紙白）

平成五年 講演「地域づくりと文化」元映画プロデューサー山ノ井政則、文化祭講演「車椅子からの旅立」エッセイスト鈴木ひとみ、文化協会創立三周年記念事業、佐賀にわか 筑紫美主子公演 観劇五六〇名、川柳教室「佐賀番傘川柳会」菖蒲正明

平成六年 講演会「川柳の心」菖蒲正明、久保田こぜ宿の会「こぜ唄伝承者」竹下玲子公演、佐賀地区文化団体連絡会設立総会（十月十四）県民ふるさと文化祭参加、文化祭講演女優 正司歌江、わらび座公演 町おとしグループ後援、兵庫県南部地震被害者救援募金二二四、八〇〇円佐賀善意銀行預託、史跡探訪 白石・鹿島

平成七年 講演「文化とマスコミ」フリーアナウンサー林田スマ、表彰 坂井岳撰・藤間美都・楠本孝枝・寺崎宗久の四氏、優秀映画鑑賞会（八月二十六〜二十七日）観賞者八四七名、第一回佐賀地区文化連絡会交流文化祭「水と緑さわやか文化祭」三月三日久保田町農村環境改善センター 六〇〇名参加、史跡探訪（鳥栖・中原）文化祭講演 清水国明

平成八年 総会講演「私と芸術文化」柴田聖山、表彰 杉光 清・西岡一義・山田キクヨの三氏。焱博久保田町催事出演（吉野ヶ里・有田）文化祭講演 橘家田蔵、優秀映画鑑賞会「人間の翼」上映、史跡探訪（武雄）

平成九年 総会講演「三弦の響き」藤本秀翠仙、表彰 藤間智華氏、藤間智華会公演 県美術館、夏休み映画祭り（青少年対象映画上映）、文化祭講演「歌之介のこれはDODA、ふるさと創り、プラス志向のすすめ」三

遊亭歌之介、優秀映画鑑賞会「男はつらいよ、二十四の瞳」、史跡探訪（大川・柳川）
平成十年 総会表彰 永瀬義明・香田ミサチの二氏、津軽三味線公演（諸富町）田中聖知子他、夏休み映画祭り、町文化祭「川柳大会」審査員（菖蒲正明・撫尾正明・遠山任平）佐賀市郡・小城市より多数参加、史跡探訪（鎮西町）

平成十一年 総会 一〇周年記念式典開催の為、評議員会を総会に替える。文化協会創立一〇周年記念式典六月二十日、表彰（感謝状二・表彰状一）贈呈 記念講演「有明の海に魅せられて」小川泰彦氏 創立一〇周年記念誌短詩形文字集発刊 十二月、一〇周年記念事業「佐賀にわか」筑紫美主子公演二月。

現状

文化協会役員（平成十三年度）

会 長	千々岩三次	選出サークル	カメラクラブ	評議員	志津田和巳	書 道
副会長	伊東悦二郎		水墨画教室		香田ミサチ	短歌（齊月会）
	原田 文代		婦人会民踊		蒲原 信子	思齊俳句会
理 事	伊東悦二郎		水墨画教室		阿南 宗博	謡曲（浩謡会）
	志津田和巳		書 道		千々岩三次	カメラクラブ
	大園ヒサ子		川柳・俳句・短歌		塚原 マツ	老連民踊クラブ
	藤間 智華		日 舞		藤間 美都	藤間美都会（日舞）
	塚原 マツ		民 踊		藤間 智華	日舞智華会
	阿南 宗博		詩吟・謡曲		原田 文代	婦人会民踊

理事	江口 麗子	選出サークル	民謡・カラオケ	評議員	船津丸静子	民謡愛好会
〃	太田美津子	〃	華道・茶道	〃	室中 和子	大正琴愛好会
〃	陣内しづ子	〃	趣味・工芸	〃	森田 義春	歌謡クラブ
〃	木下 満子	〃	リズムダンス・大正琴	〃	古賀 敏子	生花クラブ
監事	原田 善藏	事務局長	荒木 正次	〃	志津田和巳	囲碁・将棋部会
〃	田中 宗菊	庶務会計	石井 淳子			



文化祭囲碁大会



文化祭展示

〃	田中 幸子	糸ぐるま(編物教室)
〃	太田美津子	生花小原流華陽会
〃	陣内シヅ子	陣内教室(洋裁)
〃	井上 宗青	茶 道
〃	田中 宗菊	茶道裏千家
〃	木下 満子	リズムダンスきらめき
〃	大園ヒサ子	久保田川柳会
〃	伊東悦二郎	水墨画教室
〃	陣内 茂	老連カラオケクラブ
〃	鶴丸みどり	社交ダンス愛好会
〃	江口 麗子	快万民謡教室
〃	森 ヨシ子	童謡を歌う会
〃	蘭 タヅ子	ハワイアンフラダンス

2 文化協会の活動状況

総会は年一回で、事業並びに決算報告、次年度事業・予算案の審議。会の運営・会員の指導などに功労のあつた方の表彰、並びに会員の祝舞・町民歌の斉唱などを行い、記念演奏会・講演会を実施する。

理事・評議員を年六回開催、年間計画の立案・業務の推進に当る。

佐賀県文化団体連絡協議会・佐賀地区文化団体連絡会との連携を密にし、文化祭・講演会・交流会など関係事業の効率化を図る。

久保田町文化祭を、久保田町・町教育委員会、町文化協会の共催で実施。記念講演・趣味の作品展・お茶席・囲碁将棋大会・サークル発表、園児・小中学生のアトラクション等を実施する。生涯学習フェスティバル in 久保田では、会員代表の意見発表をする。

県内外の史跡を探訪し、先人の偉業・遺徳を偲び、歴史の跡を辿り貴重な文化に学ぶ会を実施している。

平成十三年度予算 一、三六二千円

(七) 文化財保護

久保田町文化財保護条例 昭和五十五年三月二十一日条例第四号

この条例は、文化財保護法(昭和二十五年法律第二二四号第九八条第二項)の規定に基づき、国・県の指定文化財で、町内に存在し、久保田町にとって重要なものの保存・活用のため必要な措置を講じ、町民の文化の向上

に資するとともに、国の文化の発展進歩に貢献することを目的とする。

文化財保護審議会

審議会は、教育委員会の諮問に応じて久保田町文化財保護条例（昭和五十五年久保田町条例第四号）に規定する事項その他文化財の保存および活用に関する重要事項について調査審議し、及びこれらの事項に関して教育委員会に建議する。

歴代文化財保護審議会委員

船津丸一郎	昭和六十一	六・十六	昭和六十四	六・十五
中尾 貞次	夕	夕	平成 六	六・十五
川野 順二	夕	夕	夕	十・六・十五
中野 和	夕	夕	夕	現在
森 四郎	夕	夕	夕	現在
原 晃道	平成 二	夕	夕	現在
鍵山 恒治	夕	六・夕	夕	現在
白浜 壽	夕	十二・十一	一	現在



木造阿弥陀如来坐像

県指定重要文化財（指定 佐賀県教育委員会）

仏像 木造阿弥陀如来坐像 所有 三学寺 久保田町大字久富 （上恒安）

蓮華座上に結跏趺坐し、定印を結ぶ像高三六センチの木造阿弥陀如来坐像で、檜材の一本造り。技術

的には稚拙だが肉付きは張りがあり、写実的表現に力を入れる鎌倉仏作風。像の背部には国家の繁栄と施主の幸福を祈願した墨書銘があるが、末尾に鎌倉時代末期の「文保」の年号が記されている。一九七五年（昭和五十）県立博物館の「肥前の仏教美術展」開催に伴う調査で鎌倉時代の作であることが確認された。

建造物

香椎神社四脚門 一九七八年三月二十日、県重要文化財指定。佐賀県立博物館蔵
所有 香椎神社 久保田町大字徳万二五五〇（快万）

香椎神社の祭神は、神功皇后・応神天皇・住吉神で、安元三年（一一七七）頃に窪田因幡守藤原利常が、久保田村矢櫃の森という所に勧請したが、後に現在地に社地替えになったと伝えられている。

この門は、一間一戸の四脚門で、屋根は切妻造の本瓦葺きである。自然石の礎石に角柱を建て柱に頭貫を通し、三斗実肘木を組み、その上に桁を通した簡単な構架であるが、意匠は自在にして雄大であり、臺股その他の彫物に桃山様式の華麗・豪壯の余風が認められる。この門の建立年代についての記録はないが、その構造様式から見て江戸時代初期の建立になるものであろうと推定される。

全体に荒廃の度がひどかったが、昭和三十七年に解体修理が施され、腐朽材は取り替えられ、後世の付設部分も取り除き、面目を一新するに至った。

町指定重要文化財（指定 久保田町教育委員会）

石造物 香椎神社肥前鳥居 所有 香椎神社 久保田町大字徳万二五五〇（快万）

肥前鳥居は、佐賀市を中心とする肥前一带のほか、長崎県や福岡県の一部にも分布する。

埋蔵文化財

一五八五年（天正十三）の造立銘を有する杵島郡有明町稲佐神社のものを最古とし、江戸時代初期に数多く造立され、延宝年間（一六七三〜八一）ころから著しくその数は減っている。香椎神社の肥前鳥居の造立銘は一六〇六年（慶長十一）龍造寺政家が一門の安泰を祈願して建立している。一六〇三年（慶長八）造立の佐賀市与賀神社三の鳥居の肥前鳥居は国の重要文化財である。

最近、住宅地の開発が進み、地下に眠っていた埋蔵文化財の発掘が進められているが、今まで未知の世界に調査の鍬が入れられている。この事は、やがて古き良き時代の久保田の祖先の姿を学ぶ資料として、町民の前に展示されることであろう。

上恒安遺跡発掘調査

久保田町教育委員会では、大字徳万字上恒安において、宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施した。県文化財課に専門職員の派遣を依頼し、開発面積二、〇〇〇平方メートル、調査対象六〇〇平方メートル、平成十三年五月八日〜六月十六日迄実施。町内在住作業員延べ二六八人。

調査結果、古墳時代、平安時代、中世（鎌倉時代）、近世（江戸時代）を主体とした遺跡であることが分かった。遺構としては、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡等が発見された。かめ・壺・皿などの土器類や曲物等の木製品をはじめ多くの遺物が出土した。

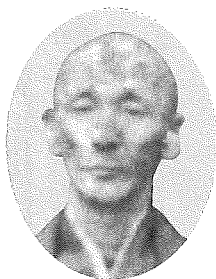


埋蔵文化財発掘調査（上恒安）

九 久保田町の人物

村 田 若 狭

文化十一年〜明治六年（一八一四〜一八七三） 政治家



久保田邑主。龍造寺政家の後裔。名は政矩、慶吉郎、「西麒」と号す。

深堀邑主鍋島孫六郎の二男で村田家を継ぐ。表高一万三〇八〇石、物成四三〇〇石を有す。家督を相続直後、邑地の海面を干拓して良田となし、大に民力の扶植に努めた。藩主鍋島直正及び直大の信任を得て常に家士を長崎に遊学させ蘭学を修めさせ郷校を再興し、西洋文物の普及を図った。文久年間には幕府の蘭医ボードインを招き長崎に病院を建てた。種痘を奨励し、銃砲製造場を創設。蒸気船の模型を作り嘉瀬川に浮かべる等科学的研究に熱心であった。明治の初め佐賀藩の執政となり、封土奉還の議を主張廃藩置県に功あり。プロテスタントのキリスト教を信仰し、諸藩の重職にして受洗のさきがけとなった。幕府の命により、長崎警備のため藩から度々出向、同地滞在のフルベッキに英語を学び、家臣が港で拾った英書に興味を覚え読み始めた。従来それは『聖書』であったとされるが、伝道用のトラクトであり、フルベッキは改めて『聖書』を与えて指導すること四年、慶応二年四月六日（一八六六年五月二十日）弟綾部とともに受洗した。

藩主鍋島直大も好意を寄せ、棄教させることなく彼を引退させた。その後久保田村に隠棲、漢訳『聖書』の邦